五日市場遺跡発掘調査報告書

1994

塩尻市教育委員会

中信勤労者医療協会

調査区全景（北西から）

調査区全景（南東から）

遺跡遠景

第４号住居跡出土灰釉陶器

序

今回はからずも、塩尻協立診療所の建設に際して、桟敷・長畝一帯に存在するとされる埋蔵文化財の発掘調査を行うことになりました。

多少の戸惑いはあったものの、幸い平出博物館館長先生はじめ塩尻市教育委員会の適切なご指導を賜り、病院職員や友の会員までがその作業に参加することができました。

当該地域の発掘作業は完了して、今はその上に診療所が開設されて、毎日にわたって医療と現代の人々の健康の事業が営まれているわけですが、文化財の保護事業に参加できたことで、古墳～平安時代の遺跡を知る上で一端とはいえ役立つことができて大変嬉しかったばかりでなく、折にふれ、時代に触れて、地域の歴史をともに語ることができることとなったことは、中信勤労者医療協会としても意義深いものと存じます。

この機会に改めて関係された皆様に御礼申し上げるしだいです。

1994年3月

医療法人（社団）中信勤労者医療協会

理事長　宇留賀　行　雄

序

近年、塩尻市は道路整備や県的施設の建設、民間での開発等が急増し、それらに伴って埋蔵文化財の緊急発掘調査も増加傾向にあります。これらの調査によって、原始・古代を中心とする多くの貴重な資料が発見され、その幾つかはこの地方のみならず全国的にも注目を集め、古代史解明に大きな前進をもたらすこととなりました。桟敷地区に存在します五日市場遺跡は過去の調査によって弥生時代から中世にかけての大集落であったことが明らかとなっていますが、今回この遺跡の一部が協立病院の建設予定の地域に入っていたため記録保存のために緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は、市文化財調査委員長中島章二先生を団長とする調査団によって、まだ寒さの続く3月に実施されました。幸い大雪に見舞われることもなく作業は順調に進み、当初の予想どおりの多くの成果をあげて終了することができました。平安時代を中心とします多くの住居や出土品の発見は、この地域の古代の様相を明らかにする上で貴重な資料となるものといえます。

今回の調査が大きな成果をあげつつ終了できましたのは、医療法人（社団）中信勤労者医療協会の御理解と御支援の賜物であり、衷心より感謝申し上げるものであります。また、献身的に作業に御協力をいただきました中島章二先生はじめ調査団の皆様ならびに、関係者の皆様、そして休憩所の借用等に格別なご配慮をいただきました竹原元重氏にも深甚なる感謝を申し上げます。

平成6年3月

塩尻市教育委員会

教育長　平　出　友　伯

例　言

1．本書は、医療法人（社団）中信勤労者医療協会塩尻協立診療所建設工事に伴い、平成５年３月４日から３月２９日にわたって発掘調査した長野県塩尻市大字桟敷に所在する五日市場遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査経費については中信勤労者医療協会からの委託によっている。

3．遺物および記録類の整理作業から報告書作製は、平成５年１１月から平成６年３月にかけて行った。

4．本書の執筆は、第Ⅰ章第３節・第Ⅲ章第３節遺構を小口達志が、第Ⅱ章を鳥羽嘉彦が、これ意外を小林がそれぞれ分担した。

5．本書の編集は小林が行った。

6．調査にあたり中信勤労者医療協会の皆さん・発掘調査団（団長中島章二氏）の皆さんならびに隣接地地主の竹原元重氏の御支援に対し感謝申し上げる。

7．本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　　次

序

例言

第Ⅰ章　調査状況

第１節　発掘調査に至る経過……1

第２節　調査体制……2

第３節　調査日誌……2

第４節　遺跡の状況と面積……4

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　自然環境……5

第２節　周辺遺跡……6

第Ⅲ章　調査結果

第１節　過去の調査と調査方法……9

第２節　調査概要……10

第３節　遺構・遺物

１）　住居址……12

２）　小竪穴……26

第Ⅳ章　まとめ……34

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

平成4年度

平成4年 8月27日　医療法人（社団）中信医療協会、市教委により調査箇所について現地協議

9月 2日　中信勤労者医療協会より市教委に塩尻診療所（仮称）建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について（依頼）

9月24日　市教委より中信勤労者医療協会に塩尻診療所（仮称）建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について（回答）

平成5年 2月 1日　中信勤労者医療協会より文化庁長官あて埋蔵文化財発掘について（届出）

2月26日　市教委より文化庁長官あて埋蔵文化財発掘について（通知）

3月 2日　塩尻診療所（仮称）建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の委託契約を中信勤労者医療協会と市教委とで締結し、更に市教委と五日市場遺跡発掘調査団団長中島章二と再委託の契約を締結（発掘調査分）

3月30日　五日市場遺跡発掘調査団より市教委に五日市場遺跡発掘調査の終了について（報告）

3月30日　市教委より県教委に五日市場遺跡発掘調査の終了について（通知）

3月30日　市教委より塩尻警察署長あて埋蔵文化財の拾得について（届）

3月31日　市教委より中信勤労者医療協会に埋蔵文化財発掘調査完了届提出

平成5年度

平成5年10月26日　塩尻診療所（仮称）建設に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査の委託契約の締結（整理・報告分）

発掘調査計画書（一部のみ記載）

1．発掘調査地　塩尻市大字桟敷437番地

2．遺　跡　名　五日市場遺跡

3．発掘調査の目的及び概要　開発事業協立病院建設工事に先立ち400㎡以上を発掘調査して、記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は平成5年3月30日までに終了する。調査報告書は平成6年3月25日までに刊行するものとする。

4．調査の作業日数　発掘作業16日、整理作業17日、合計33日

5．調査に要する費用　1,749,000円

6．調査報告書作製部数　300部

第2節　調査体制

団　長　中島　章二（塩尻市文化財調査委員会委員長）

担当者　小林　康男（日本考古学協会員　市教委）

調査員　小口　達志（長野県考古学会員　市教委）

　　市川二三夫（長野県考古学会員）

　　小松　　学（長野県考古学会員、市教委）

参加者

赤沢捨治・伊藤正也・伊藤和則・内川初雄・小沢甲子郎・小松美さ子・小松幸美・小松美喜男・小泉忠行・清水年男・新家政市・鈴木明子・竹原仙治・高橋阿や子・高橋鳥憶・中野とめ子・二木みつ子・二木忍・藤松謙一・三浦保男・百瀬若美・山口仲司・由上はるみ・米窪岱二・米窪よし子・米久保仲子・赤沢太・中野勝史・飯村哲也

事務局　塩尻市教育委員会教育長　　平出　友伯

　　市教委・総合文化センター所長　　武井　範治

　　市教委・文化教養課長　　松崎　宏征

　　市教委・文化教養課・課長補佐　　大和　清志

　　市教委平出遺跡考古博物館館長　　小林　康男

　　〃　　学芸員　　小口　達志・小松　　学

協力者　中信勤労者医療協会理事長　宇留賀行雄

　　松本協立病院院長　　古畑　信彦

　　松本協立病院職員　発掘参加者35名

　　塩尻協立診療所建設委員会委員長　米山　芳隆

　　〃　　事務局長　野口　正泰

　　中信協立病院友の会　会長　大熊　　淳

　　〃　　塩尻支部長　中柴　　弘・赤津　　勉

　　〃　　竹原　元重・竹原　仙治

　　〃　　内山　洋子・小松　和登

　　〃　　事務局　塩原　恒一・上條　小晴・上條　五七

第3節　調 査 日 誌

平成5年3月 4日（木）晴　バックホーによる表土除去。調査区中央付近から平均30cmの厚さで削平。土師器片・須恵器片・灰釉陶器片出土。器材搬入。

3月 5日（金）晴　本日から作業開始。協会から野口理事、教育委員会側から小林博物館長の挨拶があった後、事務局から発掘日程、作業方法等の説明。終了後、全員で調査区東側からジョレンによる遺構検出作業を開始する。表土の下はすぐローム層や礫層であったため容易に検出でき8軒の住居址を確認する。

3月 6日（土）晴　第1～3、5、8号住居址掘り下げ。第3号住居址出土遺物取り上げ。

3月 7日（日）、3月 8日（月）定休日。

3月 9日（火）晴　第1～9号住居址掘り下げ。第1、3、8号住居址出土遺物取り上げ。第3号住居址セクション図化、ベルト除去。第7号住居址西側に周溝と床面を検出し、第10、13号住居址とする。

3月10日（水）晴　第1、2号住居址遺物取り上げ。第4号住居址掘り下げ床面でレベルの違いを確認したため、調査区外の北西にかかる住居址を第12号とする。

3月11日（木）晴　遺構検出作業がやや不十分であったため、全域にわたり再度、検出作業を行う。その結果、調査区東側から中央部にかけて土坑を検出する。

3月12日（金）曇　第1、2、4、5、12号住居址掘り下げ。第6、7、9、10、11号住居址セクション図化、ベルト除去。3月17日まで非常に寒い天候が続く。

3月13日（土）晴　第4、5、12号住居址掘り下げ。土坑半截後セクション図化。

3月14日（日）、3月15日（月）定休日。

3月16日（火）曇時々雪　第6、7、9号住居址遺物出土状態写真撮影。第10、11号住居址遺物出土状態図化。第3、8号住居址完掘、写真撮影。第4、5、12号住居址掘り下げ。土坑群掘り下げ。

3月17日（水）晴　第6、7、9、10号住居址遺物出土状態図化。第4、5、12号住居址掘り下げ。

3月18日（木）晴　第1、2、6、7、9、11号住居址柱穴掘り下げ、完掘、写真撮影。第4、5、12号住居址掘り下げ。

3月19日（金）晴　第9、10、11号住居址平面図作図。第4、5、12号住居址掘り下げ。

3月21日（日）、3月22日（月）定休日。

3月23日（火）晴　第4、5、12号住居址掘り下げ。第9、10、11号住居址平面図作図。ようやく春らしい天候となった。

3月24日（水）晴　第4、5、12号住居址遺物出土状態写真撮影、遺物取り上げ。雨天にて午後の作業中止。

3月25日（木）晴　第4、5、12号住居址柱穴掘り下げ、完掘、写真撮影。調査区の清掃作業、全体写真撮影。器材撤収。本日をもって作業員による作業を終了する。

3月26日（金）晴　第1～3号住居址平面図作図。

3月27日（土）晴のち曇　第6～8号住居址平面図作図。

3月28日（日）晴時々雪　第4、5、13号住居址平面図作図。

3月29日（月）晴時々雪　調査区中央から北側に拡がる土坑群の平面図作図。本日をもって現場における作業を終了する。

整理作業は、平成5年12月から平成6年1月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図・図版作成を行う。報告書の原稿執筆も平行して実施する。

第4節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場　所	現　況	種　類	全体面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
五日市場	塩尻市大字 桟敷437番地	畑	包蔵地	14,000 ㎡	400 ㎡	500 ㎡	1,749,000円

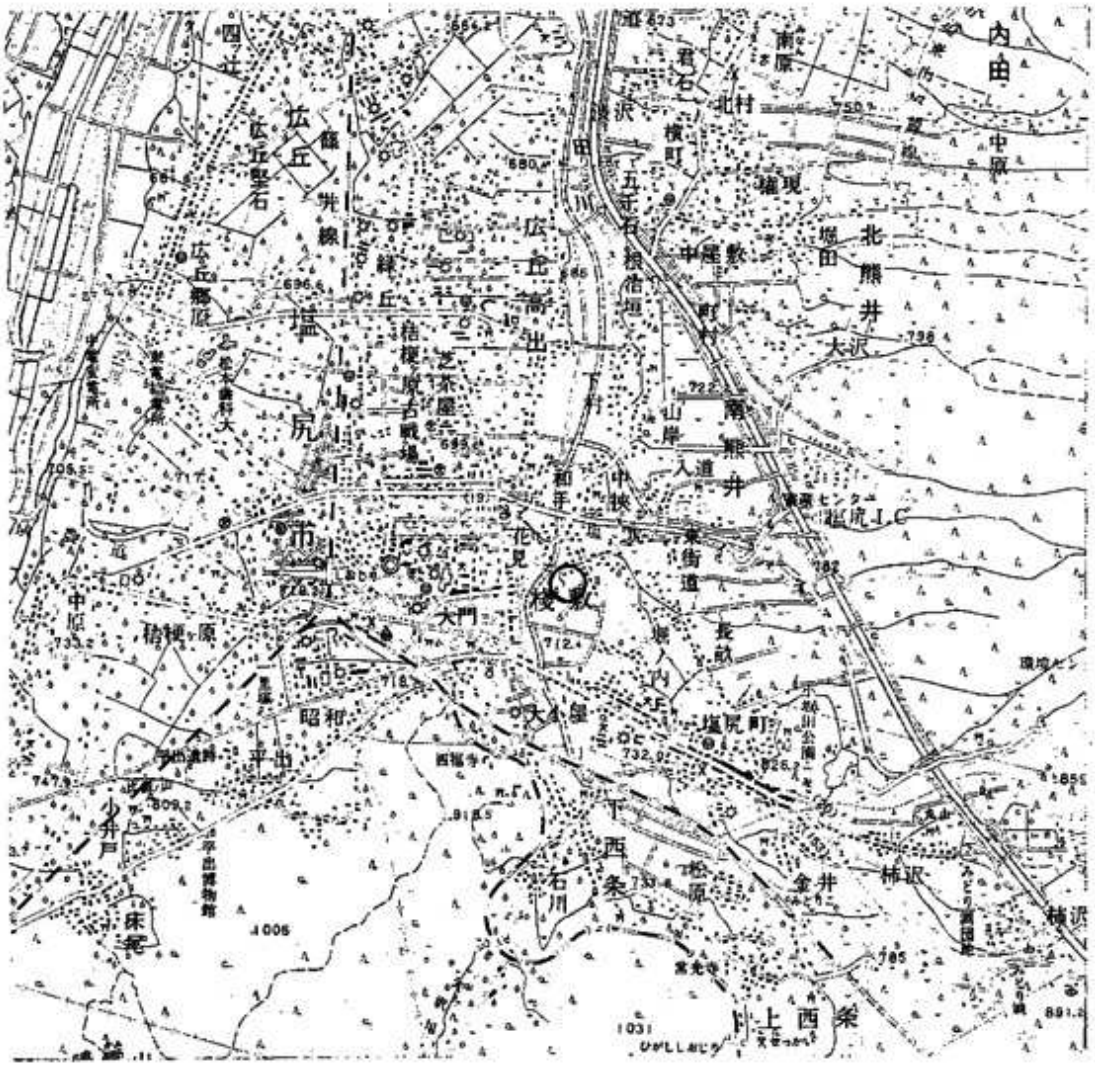
第1表　発掘調査経過表

年度＼月	10	11	12	1	2	3	主な遺構	主な遺物
5					発掘 4～29		平安時代住居址 13	平安時代 土師器、須恵器 灰釉陶器
6	整理報告書作成 16～18						平安時代土壙　57	

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第1節　自 然 環 境

塩尻市の中心部である大門市街地から岡谷、諏訪方面へ抜ける塩尻峠までの地形を概観すると、高ボッチ山塊に展開する広大な山麓斜面と田川によって形成された扇状地形、およびその中を開析流下する田川、四沢川、権現沢川など数本の小河川によって代表される。扇状地は長さ約4.5km、幅約2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から桟敷、入道地区に至る



1：50,000　500　0　500　1,000　1,500m

第1図　位　置　図

狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地（桔梗ケ原台地）に連なっている。標高は扇頂で900m、扇端で710m、平均斜度3°である。田川およびその支流である四沢川、権現沢川によって開析された所謂、開析扇状地であるが、これは河川の勾配が浸食を助けているのに加え、この付近が著しい地盤隆起地帯であることに起因している。隆起量は中央部の柿沢付近で1.6mm／年であるが、峠に近づく程その数値は高くなる傾向にある。

田川は東山山麓に源を発しており、塩尻峠の山間渓谷を西へ下り、四沢川、権現沢川などの諸河川を集めながら下西条で流れの向きを北にかえ、松本市の西部で奈良井川に合流している。塩尻東地区では大扇状地形を形成しており、現在広く水田畑地に利用されているほか旧塩尻宿もこの上に乗せている。

一方、高ボッチ山塊西麓斜面沿いには片丘丘陵が南北に発達しており、小坂田公園付近から松本市の寿付近まで2km前後の幅を維持しながら約10kmにわたって延びている。ここは断層運動によって生じた崖錐性堆積物を基盤としているため、平均勾配6°とかなり急な斜面を西へ向けている。丘陵上には山麓から流下する群小の河川によって形成された複合扇状地がよく発達しており、その扇端は盆地縁辺の河岸段丘面に接している。

今回の発掘地点は、ちょうどこの田川扇状地と片丘丘陵の縫合線上にあり、田川とその支流である鋳物師屋川によって形成された小舌状台地に立地している。

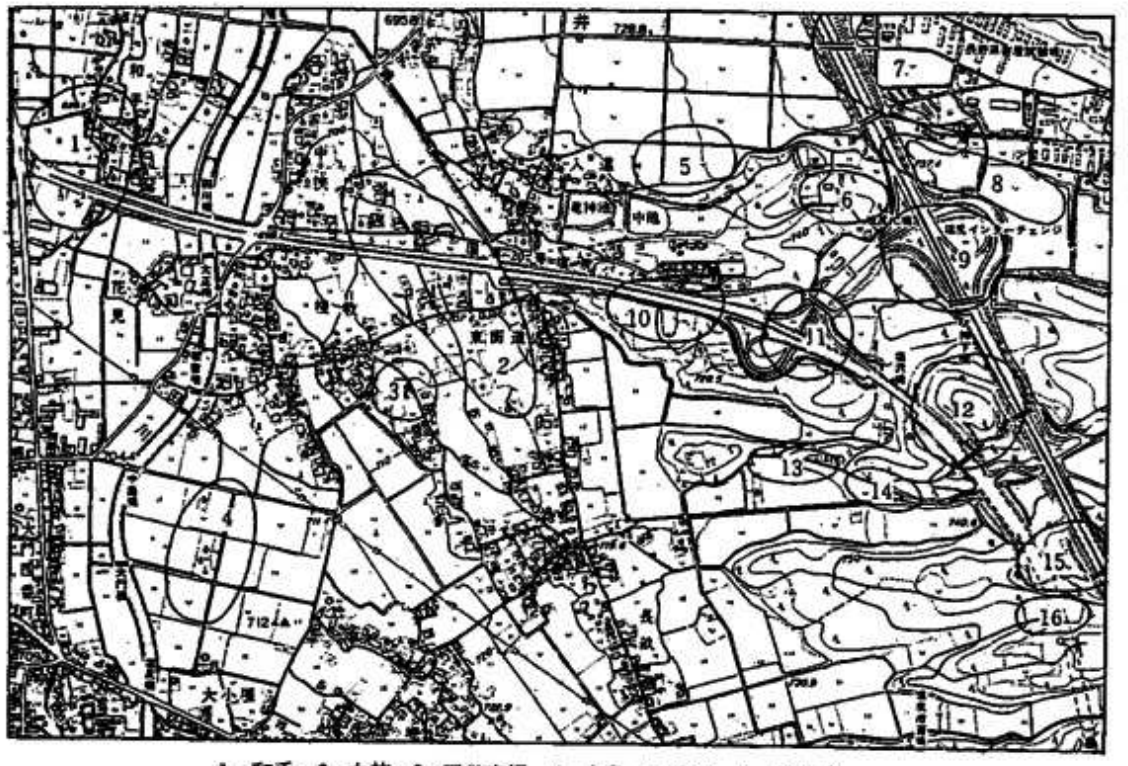
五日市場遺跡は桟敷集落の東はずれにあり、みずほ保育園の北約150mのところから展開する。前述の中挟遺跡発掘箇所からは低地帯を挟んで約100m西側にある。遺跡の範囲はまだ正確に把握されていないが、現在のところ600㎡以上の規模を有すると推測されている。遺跡の名称となった「五日市場」については、遺跡の中心付近の小字名によるものであり、正確な位置は別として付近一帯、中世の市に関係の深い場所として以前より注目されていた。

地形的にみると、隣接する中挟遺跡と同様、南北方向の微高地上を占有しており、日照、水利とも公的な立地条件を満たしている。東側の低地帯との比高差は僅か50cmしかなく、洪水時の影響は東側斜面に顕著に残されているが、しかし静穏期には逆に低地帯を横断して隣接する中挟遺跡の古代集落と何らかの接触があったことも想像に難くない。

第2節　周辺遺跡

今回、発掘対象となった五日市場遺跡は塩尻市街地の東側、田川の右岸段丘上に位置する遺跡である。本地域の周辺には近年、ほ場整備事業や国道20号線塩尻バイパス建設関連で発掘調査が実施された遺跡が幾つかあり、以下それらの発掘成果を概観してみたい。

中挟遺跡　昭和61年および平成2年に土地改良事業およびバイパス関係で発掘調査が行なわれた。調査面積は7,900㎡で、住居址74、方形周溝墓4、建物址11、小竪穴69が検出された。住居址の内訳は縄文中期3、弥生後期3、古墳10、平安56、中世1、不明1である。長期にわたる集落遺跡で、しかも各時期の拠点的な集落と考えられるほどの規模をもつ。



1. 和手　2. 中挾　3. 五日市場　4. 中島　5. 入道　6. 榛ノ木
7. 山ノ神　8. 竜神平　9. 竜神　10. 向陽台　11. 北原　12. 高山城
13. 福沢　14. 堂ノ前　15. 樋口　16. ヨケ

第2図　遺跡分布図

和手遺跡　田川の左岸に対峙しており、昭和62年にやはりバイパスと市道関係で発掘調査が行なわれた。調査面積3,080㎡で、住居址35、方形周溝墓3、建物址3、溝址2、小竪穴11が検出され、住居址の内訳は弥生後期3、古墳末～奈良初頭7、奈良前葉～中葉6、奈良末～平安初頭8、平安前期8、平安中期2、不明1である。奈良時代を中心とする遺跡としては、市内でも最大規模に属する。

中島遺跡　昭和50年、田川地区ほ場整備事業に関連して発掘調査が行なわれた。今回と同じ田川右岸の約500m上流側に位置する。調査面積は856㎡で、縄文中期住居址14、弥生後期住居址5、奈良住居址1、小竪穴3が検出された。田川の自然堤防上の遺跡の中で、弥生期は他に田川端などに大集落が発見されたが、縄文中期は珍しく、該期の遺跡立地からみても特異性がある。

向陽台遺跡　中挾遺跡とは鋳物師屋川を挾んで東側の台地上に所在する。昭和60・61年にバイパス関係で4,500㎡が発掘調査された。縄文早期住居址4、同集石炉4、縄文前期住居址4、弥生後期住居址6、方形周溝墓1、小竪穴30が検出され、とりわけ縄文早期前半の国内最大規模の住居址の発見と同時期の集落址の確認は大きな成果であった。

北原遺跡　隣接する向陽台と同じ昭和60年に、バイパス関係で2,800㎡が発掘調査された。縄文前期住居址4、縄文中期住居址3、小竪穴44で、縄文前期～中期初頭の集落としては松本平でも数少ない遺跡の一つである。

福沢遺跡　中挟遺跡の横を流れる鋳物師屋川の上流にある。塩尻東地区ほ場整備事業に関連して、昭和59年に800㎡が発掘調査された。遺構は縄文早期集石址1、平安時代住居址4、小竪穴8にとどまったが、出土した遺物の中で縄文早期押型文土器の一括資料は、翌年に出土した向陽台の資料とともに押型文土器の第一級的資料となった。

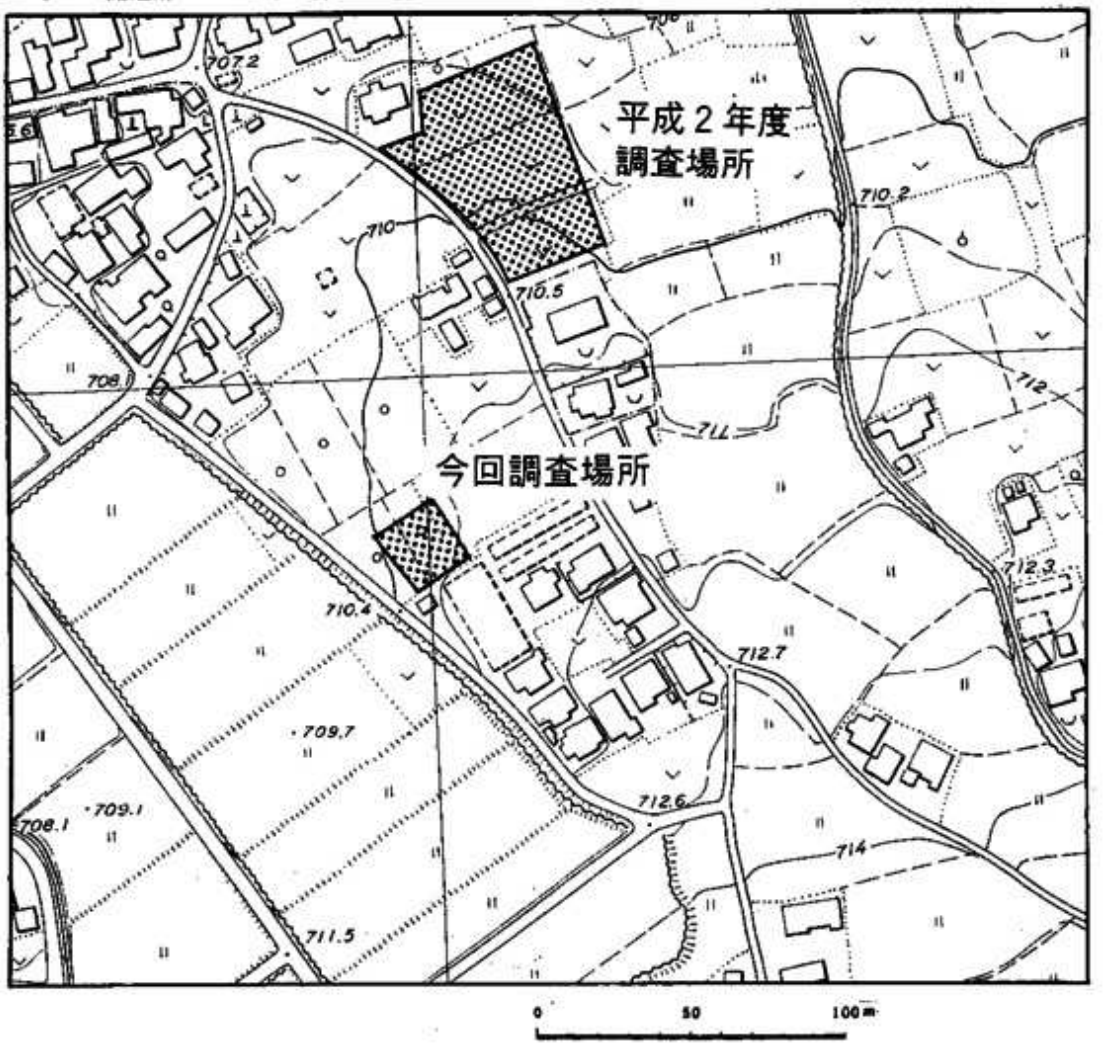
堂の前遺跡　福沢遺跡の東側に隣接しており、やや先行する形で発掘調査された。調査面積は1,200㎡で住居址12、建物址3、中世遺構1、火葬墓3、小竪穴36が検出された。住居址の内訳は縄文早期5、縄文中期3、平安1、不明3で、とりわけ縄文早期後半の集落址は松本平唯一であり、またその中の1軒は1辺13mの大形住居で全国的にも最大級に属する。

以上のように今回の調査箇所を取り囲む形で所在する各遺跡は、それぞれが第一級の遺跡であり、貴重な資料を数多く提供してきた。それらの集落の中には、今回の中挟・五日市場遺跡の集落と時代を同じにするものがいくつかあり、何らかの形でつながりをもっていた可能性はある。

第Ⅲ章　調 査 結 果

第1節　過去の調査と調査方法

五日市場遺跡は、東西200m、南北300mの非常に広範囲にわたって展開している遺跡である。平成2年に土地改良事業に関連して今回の調査地から70mほど北の地点を発掘調査している。(図3) 調査面積は2,150㎡で、弥生時代後期の住居址1、平安時代の住居址12、建物址4、小竪穴5、そして中世（14世紀頃か）の道路址1が発見され、これらの遺構に伴って弥生土器、平安時代の土師器、須恵器、鉄器、中世の青磁など多くの遺物が出土した（図4)。この調査によって、本遺跡が弥生時代から中世にかけての遺跡であることが判明し、中挟・和手・吉田向井・吉田川西などの諸遺跡とともに田川流域に営まれた拠点的大集落であったことが明らかとなった。



第3図　調 査 地 区 図

今回の発掘調査は、診療所建物予定地の表土をバックホーによって除去を行なったのちグリッドを設定した。グリッドは4m間隔で北から南へA～M、東から西へ1～11を設定した。発掘区の総面積は500㎡である。

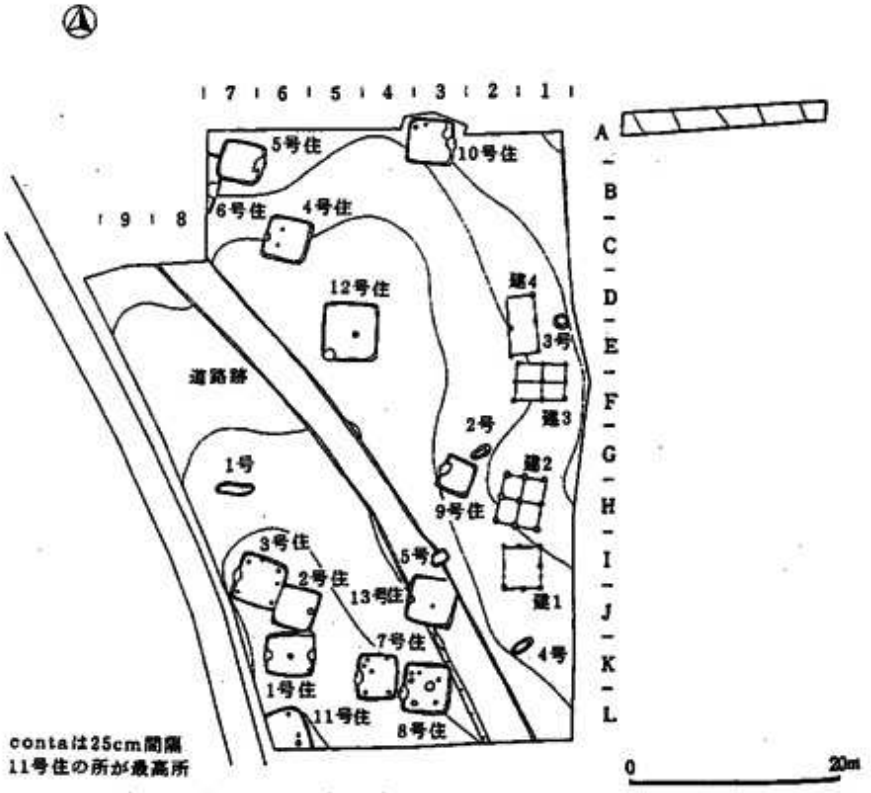
第2節　調査概要

五日市場遺跡は、田川右岸の段丘上に南北に長く展開する遺跡で、東側には浅谷をはさんで中挾遺跡と対峙している。

平成2年には、遺跡の東側部分の一部を調査したが、今回の調査区域は西側の部分にあたっている。付近は西側の田川に向かって緩やかな傾斜を示している。調査面積は500㎡である。

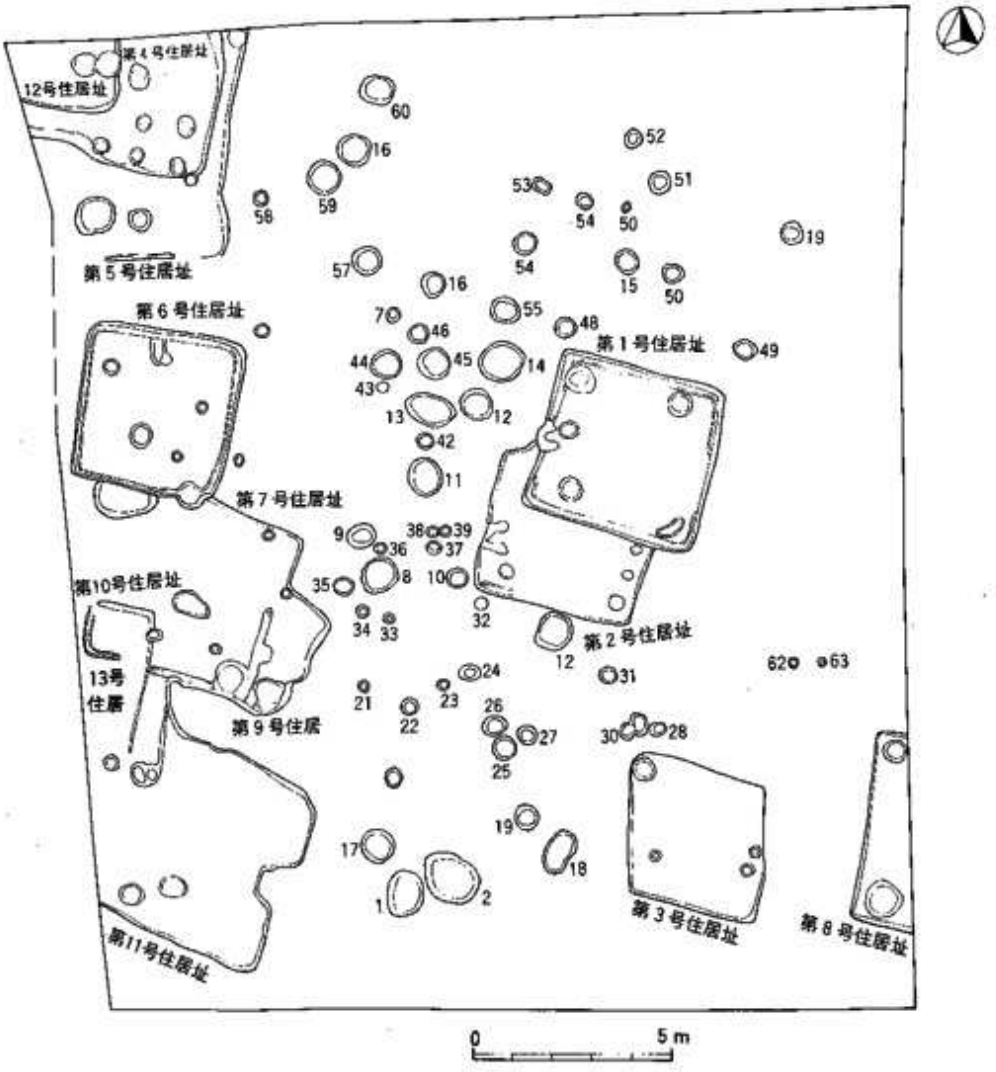
発掘調査の結果、遺構としては平安時代の竪穴住居址13軒、小竪穴57基が検出され、出土遺物にはこれらの遺構に伴う土器がある（図5）。

住居址は調査区全域に分布している。表土が浅く、また、掘り込みも浅いため壁・床など保存状態は必ずしも良好とは言い難い。また、住居址は重複が著しく、カマドの設置場所も異なっていることから時間差が考えられる。小竪穴は、調査区の全域にあり、建物址を構成する可能性も考えてみたが、規則性に乏しく、単独の小竪穴群として把えた。



第4図　平成2年度調査全体図

出土遺物は、平安時代の土師器坏、甕、鉢、須恵器坏、坏蓋、甕、灰釉陶器皿、碗、長頸瓶があり、土錘も出土している。量的には土師器が9割を占め、灰釉陶器は微量であった。土錘の出土は例が少なく、生業とも関連して注目される。なお、1号住居址から残片ではあるが金メッキされたコイル状の青銅製品が出土している。その性格とともに注意される。



第5図　調査区全体図

第3節　遺構・遺物

1）　住居址

第1号住居址

遺構　本址は調査区の中央にあり、F－5グリッドに位置する。南側は第2号住居址と重複しており、本址が掘り込みで斬っている。表土は20cm前後と浅く、重機による表土除去を始めた際、遺物が出土したこともあって、すぐに平面プランを捉えることができた。隅丸方形の平面プランを呈し、大きさは東西4.4m、南北4.2mとやや小形で、床面積は14.8㎡を測る。

床はよく踏み固められ全体的にほぼ水平で、第2号住居址との比高差は10cmを測る。周溝はカマドの南側と東壁の中央を除いて設けられているが浅い。床面にはピットが5基設けられるが、配置から4本柱の主柱穴と考えられる。カマドは西壁中央にあり焼土の堆積したわずかな掘り込みが見られる。

遺物　遺物の出土はカマド左手の壁寄りとカマドの反対の東壁寄りに集中しており、中央部からの出土は少なかった。土師器坏（1～5、7）、甕、須恵器（6）、甕、灰釉陶器長頸瓶（8）がある。土師器坏は全て黒色処理され、7は坏の底部外面に墨書されている。（9）は土錘でこの時代のものとしては珍しい資料である。この他に金メッキされたコイル状の銅製品が出土している。

第2号住居址

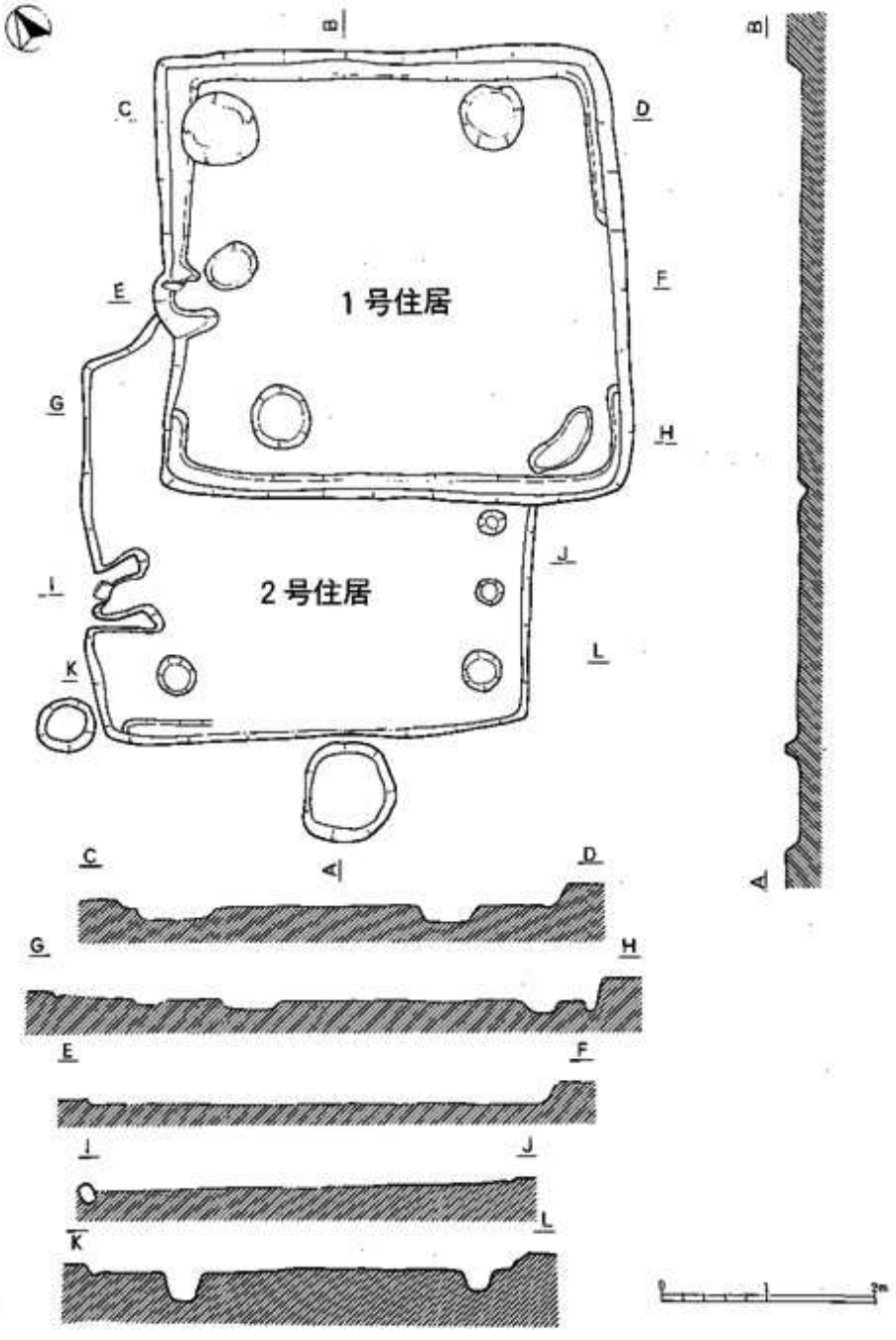
遺構　本址は調査区の中央にあり、J－5グリッドに位置する。北側には第1号住居址が重複しており、本址を掘り込みで斬っている。また、南側は12号土壙と重複しているため南壁の一部は欠如している。隅丸方形の平面プランを呈し、大きさは東西4.2m,南北3.8mとやや小形で、床面積13.6㎡を測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、東壁5cm、西壁11cm、南壁16cmを測る。

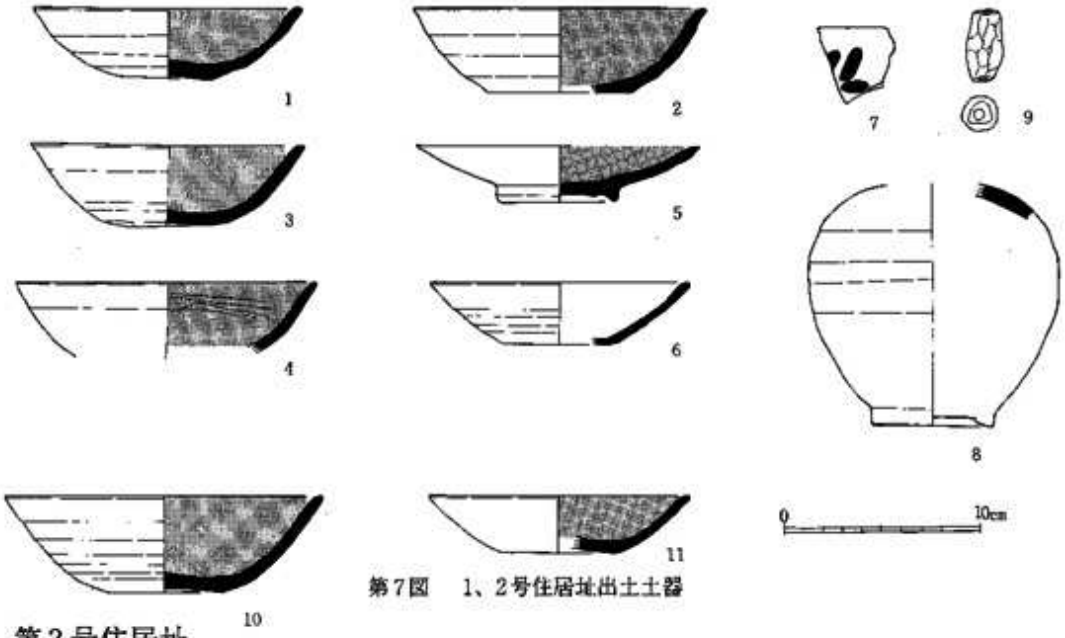
床面はよく踏みかためられ堅緻であるが、東から西にやや傾斜している。周溝は南壁の一部に認められる。ピットは床面に4基検出されているが、南壁下の2基が柱穴と考えられる。カマドは西壁中央にあり、焼土が堆積している。床面を掘り込んで構築しており、礫が残存していることから石組みの粘土カマドと考えられる。

遺物　住居の半分近くが1号住居によって切られているため出土遺物は余り多くない。出土状況は西壁に設けられたカマドの左手付近を中心としていた。図化できた10、11はともに土師器の坏で、ともに黒色処理をされている。この他に土師器甕、須恵器坏坏蓋、甕の小破片が出土している。

時期は9世紀と思われる。



第6図　1、2号住居址



第7図　1、2号住居址出土土器

第3号住居址

遺構　本址は調査区の南寄りにあり、K－3グリッドに位置する。北側には不整形の撹乱部分が重複しており、本址を掘り込んで斬っている。また、東壁は撹乱によって一部欠如している。平面形態は隅丸の平行四辺形を呈している。大きさは東西3.3m、南北3.5mと小形で、床面積9.9㎡を測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅く、壁高は東壁13cm、西壁7cm、南壁15cm、北壁5cmを測る。床面積は礫質であるが全体的にほぼ水平で、中央付近はよく踏みかためられている。ピットは床面に4基検出されている。焼土と礫が撹乱の脇でわずかに確認されたため、東壁中央にカマドが構築されていたと考えられる。

遺物　一部に撹乱が入っているとはいうものの重複もなく単独に発見された住居であったが、出土遺物は僅少であった。土師器坏（11）、須恵器（12）の2点が図化できたのみで、他に須恵器坏、坏蓋、土師器坏の小破片がわずかに出土している。

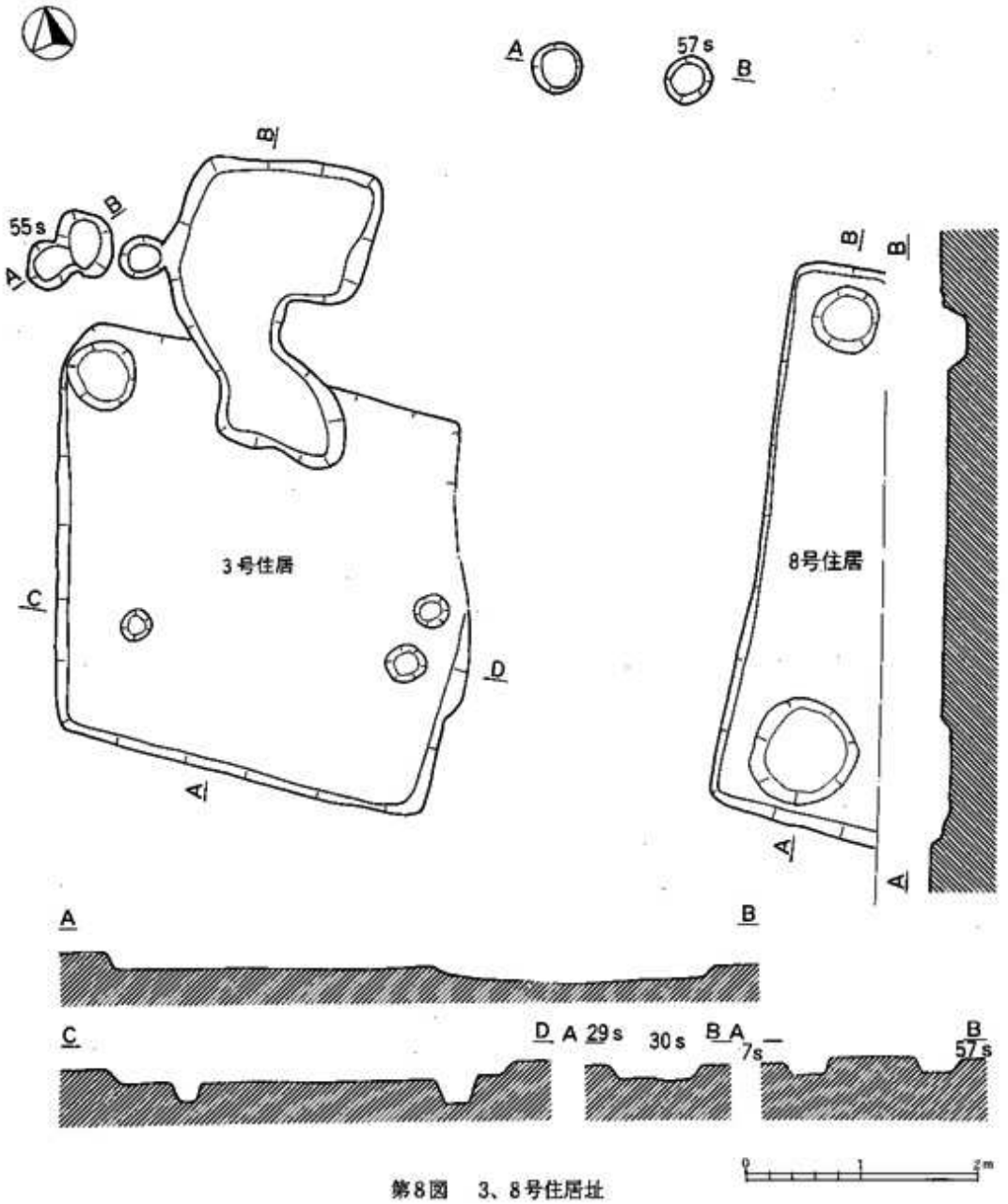
9世紀に比定できよう。

第4号住居址

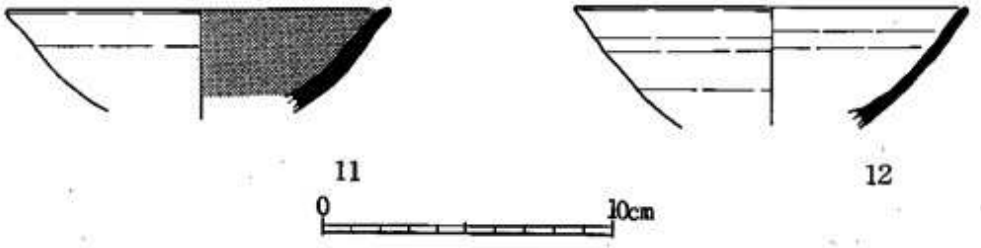
遺構　本址は調査区の北西隅にあり、A－10グリッドに位置する。南側を第5号住居址、西側を第12号住居址に斬られている。北側と西側は調査区外のためプランの全容は把えられなかったが、隅丸方形を呈した大形の住居になると予想される。

壁は緩い傾斜であるが、第5号住居址床面からの壁高は東壁14cm、南壁22cmを測り、深い掘り込みを持っている。

床面はよく踏み固められ堅緻であるが、やや起伏が著しく東側は高くなっている。第5号住居址床面との比高差は約30cmある。ピットは床面に4基、南壁に2基検出された。いずれも柱穴に



第8図　3、8号住居址



第9図　3号住居址出土土器

なり得る深さを持つが、第5号住居址に属するものと考えられる。

遺物　今回調査された住居址の中で、5号住居址とともに最も多くの遺物が出土した。土師器、須恵器、灰釉陶器がある。土師器では、坏（13～24、29、30）は全て黒色処理され、29、30は墨書がなされている。甕（31）は小形甕、（33）はハケメ調整され、鉢（32）は黒色処理されている。須恵器は、坏（25、26）と甕があり、灰釉陶器には皿（27）、椀（28）と長頸瓶とがある。

時期は9世紀である。

第5号住居址

遺構　本址は調査区の北西にあり、C－10グリッドに位置する。第4号住居址と重複し、掘り込みで本址は斬られている。西側および南側は調査区外にかかっていたためプランの全容は把えられなかった。北壁は発掘部分のみで5.7mを測り、隅丸方形を呈す大形の住居になると考えられる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は東壁21cm、南壁10cmを測る。

床面はよく踏み固められて堅緻であり、全体的にほぼ平坦である。床面からピットが2基、東壁沿いに柱穴2基が検出された。周溝は南壁下に設けられており、幅は6cmと狭いが10cmの深さがある。

遺物　4号住居址とともに今回の調査住居址の中で最も遺物の出土量が多い。土師器、須恵器、灰釉陶器がある。土師器は坏（34～44）と甕（50）がある。坏は大半が黒色処理を施してあり、（40、41、44）は「井」の、（43）は「大」の墨書がなされている。須恵器は、坏（45～49）と甕があり、灰釉陶器では長頸瓶（51、52）が出土している。

時期は9世紀に比定できる。

第6号住居址

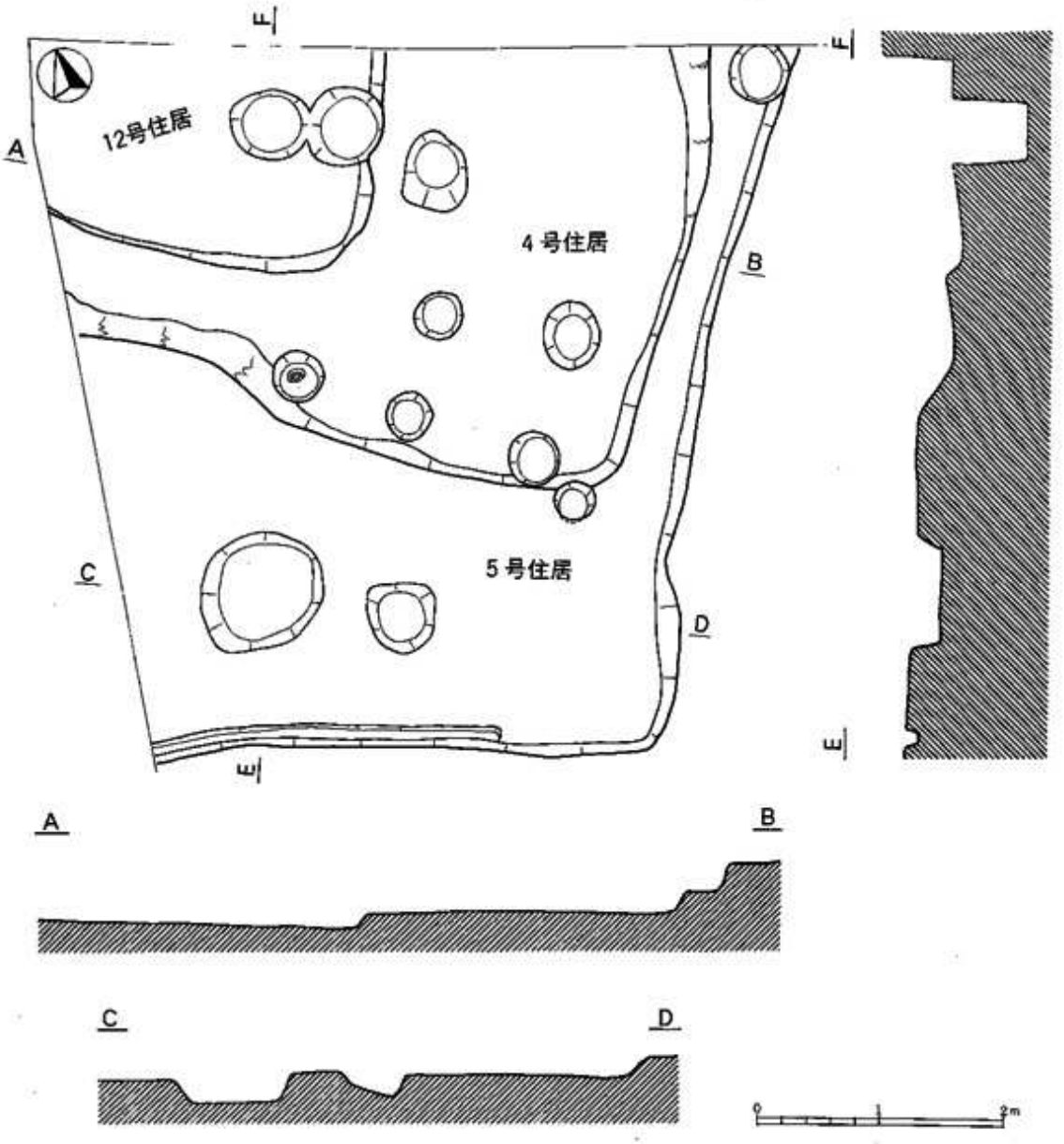
遺構　本址は調査区の西端にあり、F－10グリッドに位置する。南側は7号住居址と重複しており、本址が掘り込みで斬っている。隅丸方形の平面形態を呈し、大きさは南北4.1m、東西4.0mとやや小形で、床面積13.3㎡を測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅く、壁高は東壁19cm、西壁4cm、南壁4cm、北壁16cmを測るにすぎない。

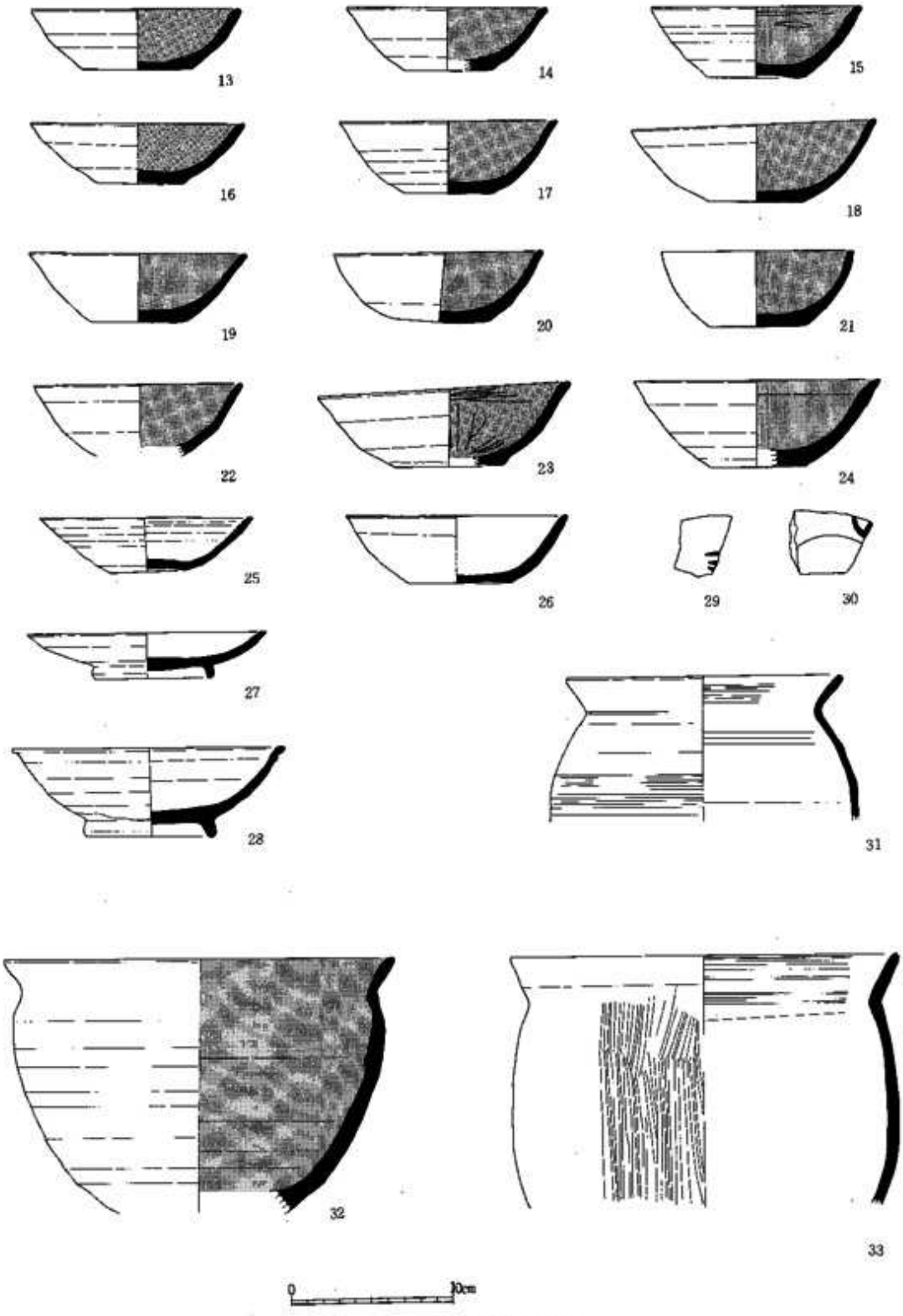
床面はよく踏み固められており堅緻で平坦である。柱穴は床面から4基検出された。周溝は壁下に全周しており、5cm前後の深さがある。カマドは北壁中央にあり、床面をわずかに掘り込んで構築していた。焼土と礫が残存し、甕の破片が出土している。

遺物　遺物の出土は北壁寄りの床面上に集中しており、カマド周辺に多いようである。土師器と須恵器が出土している。土師器は、坏（53～60）と小形甕、甕がある。坏は黒色処理を施すものが大半を占め、（58）は「井」の墨書がなされている。須恵器は坏（61）と甕がある。

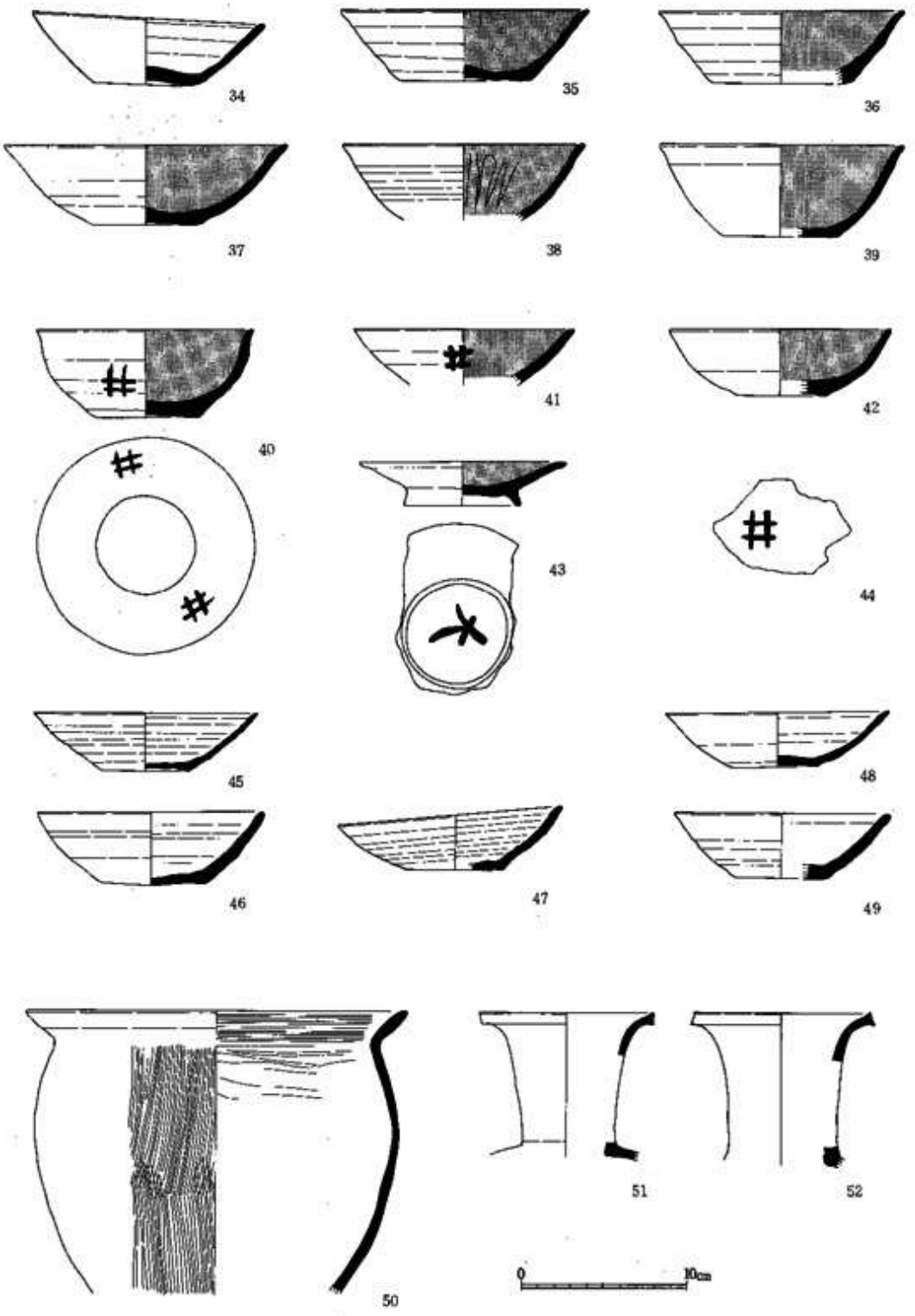
時期は9世紀後半に比定できる。



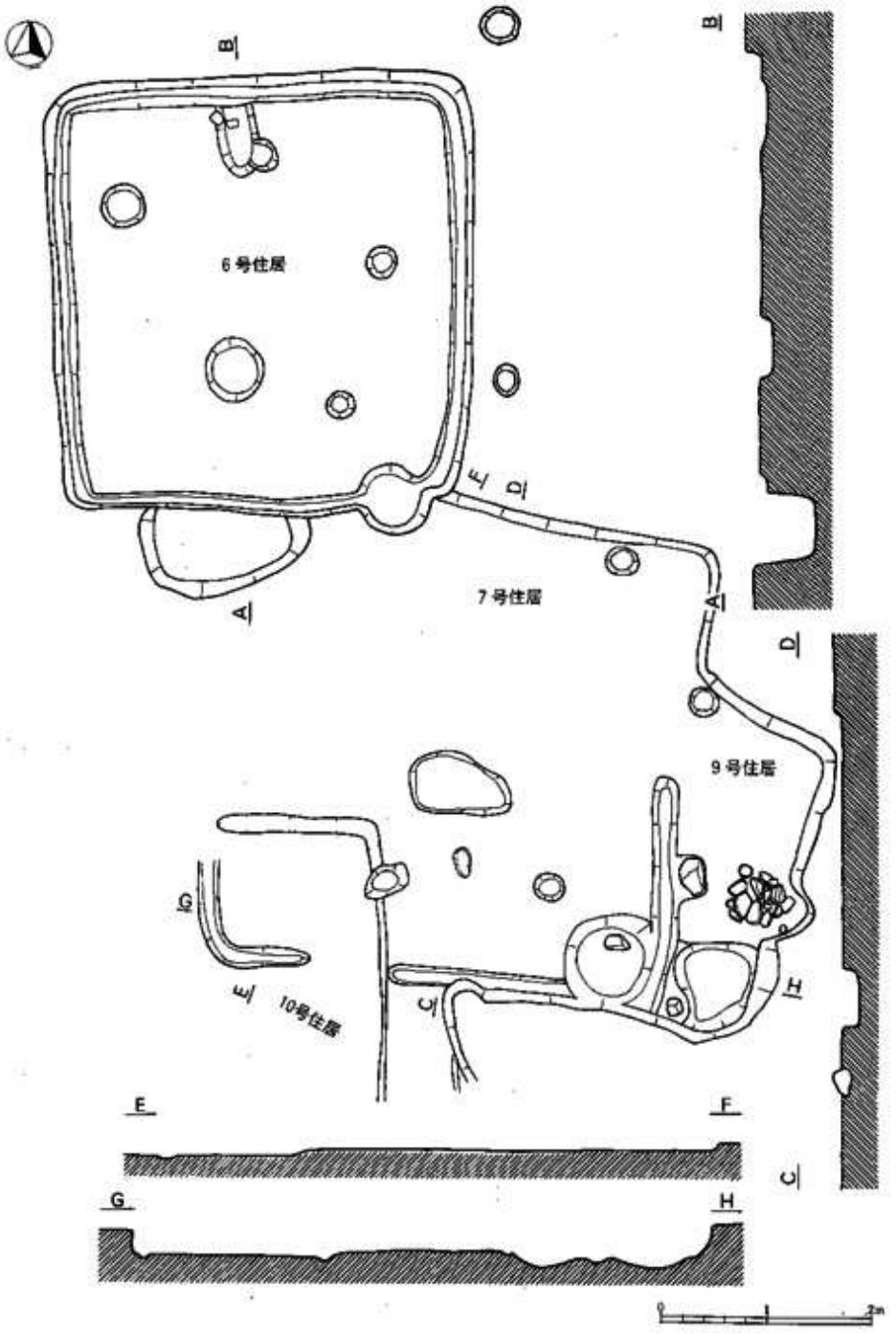
第10図　4、5、12号住居址



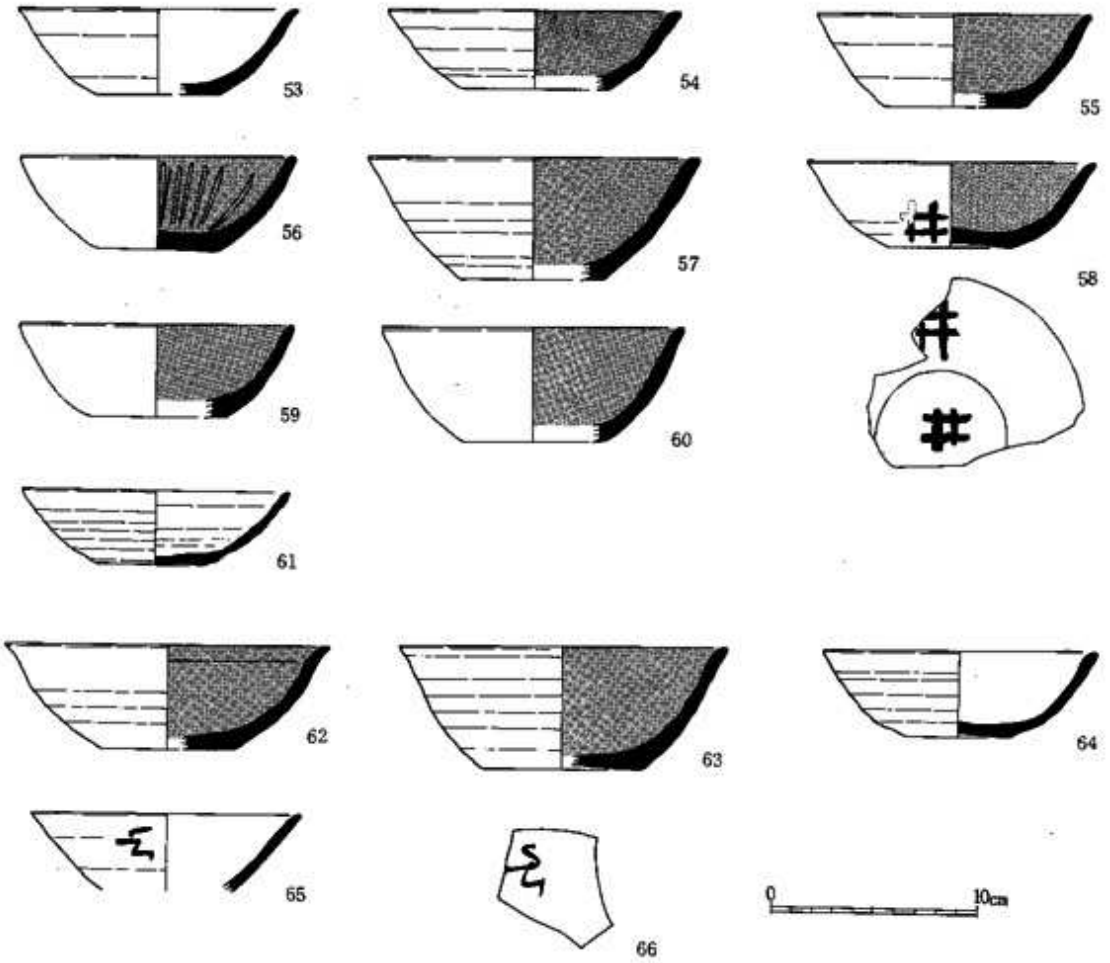
第11図　4号住居址出土土器



第12図　5号住居址出土土器



第13図　　6、7、9、10号住居址



第14図　6、7号住居址出土土器

第7号住居址

遺構　本址は調査区の西端にあり、J－9グリッドに位置する。北側は6号住居址、南側は10、11号住居址、東側は9号住居址と重複している。南側と西側は重複が著しく、わずかに残った周溝から平面形態は北壁がやや開く隅丸方形と確認できる。大きさは南北4.4m、東西4.6mを測り、床面積は17.6㎡と推定される。

壁は残存している部分でほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は東壁16cm、南壁18cm、北壁18cmを測る。

床面はよく踏み固められ堅緻で平坦である。第6号住居址床面との比高差9cm、第9号住居址床面との比高差4cmを測るが、第10号住居址床面との比高差はほとんどない。柱穴は床面から3基、第6号は住居址と重複する北壁から1基検出し、4本柱の主柱穴と考えられる。周溝は東西南壁の壁下に設けられており、幅10cm、深さ5cmを測る。カマドは北壁中央に構築され、掘り込みの上に大きな礫が残存しており、石組みカマドと思われる。

遺物 6、9号の両住居址と重複しているため遺物の出土は多くない。土師器坏（62～64）、甕、須恵器（65、66）と坏蓋、甕とが出土している。また、灰釉陶器の皿と長頸瓶の破片も得られている。

時期は9世紀である。

第8号住居址

遺構 本址は調査区の東端にあり、K－1グリッドに位置する。東側は調査区外にかかっていたためプランの全容は把えられなかったが隅丸方形を呈すると考えられる。西壁で南北4.6mを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、壁高は西壁3cm、南壁10cm、北壁4cmと非常に浅い。

床面はほぼ平坦ではあるが、礫質で堅緻な部分は検出されなかった。床面から浅い掘り込みが2基検出された。

遺物 調査された範囲がすくなかったため出土遺物も僅少で、図化できるものがなかった。土師器の黒色処理を施した坏と甕とが出土している。

第9号住居址

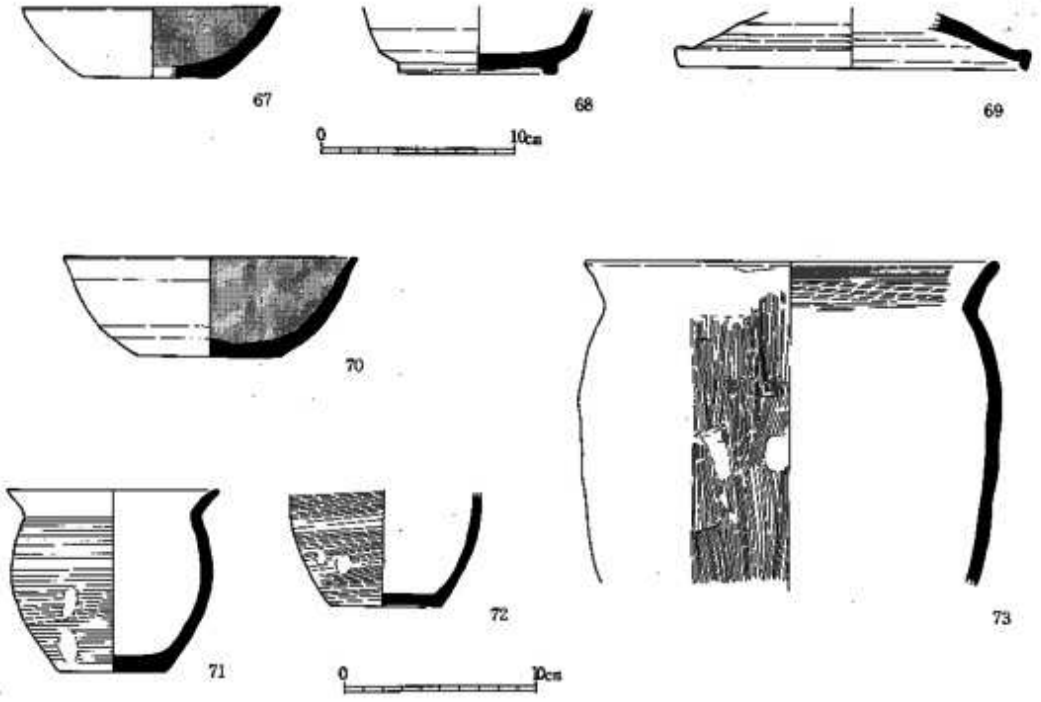
遺構 本址は調査区の西端にあり、1－8グリッドに位置する。西側は第10号住居址と重複しており、本址は掘り込みで斬られている。平面形態は隅丸方形を呈すると考えられ、大きさは南北3.1mと小形である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高は東壁27cm、南壁28cm、北壁23cmと一定値を有する。

床面はよく踏み固められ非常に堅緻である。平坦ではあるが、南東隅にやや大きめの浅い掘り込みがあり、柱穴は10号住居址と接する北壁から1基検出されている。カマドは北壁中央にあり、床面を掘り込み20cm弱の礫を敷きつめた石組みカマドである。

遺物 7号、10号の両住居址と重複しているため遺物の出土は少ない。出土状態は床面全体に散在し、集中箇所は認められない。土師器坏（67）と甕、須恵器坏（68）、坏蓋（69）が出土している。

時期は9世紀代である。



第15図　9、10号住居址出土土器

第10号住居址

遺構　本址は調査区の西端にあり、I－11グリッドに位置する。北側は第10号住居址、南側は第11号住居址と重複し、第13号住居址とは、ほぼ同位置にある。東側と北側の周溝が一部残存し、平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。

床面はよく踏み固められて堅緻で平坦である。東側周溝の南端に接し柱穴が1基検出されたが、本址に伴うか不明である。第10号住居址床面との比高差5cm、第13号住居址床面との比高差7cmを測る。

遺物　土師器と少量の須恵器が出土している。土師器では、坏（70）と小形甕（71、72）、甕（73）があり、他の住居址と比較して甕の出土が目立つ。須恵器には甕の小片がある。

9世紀代であろう。

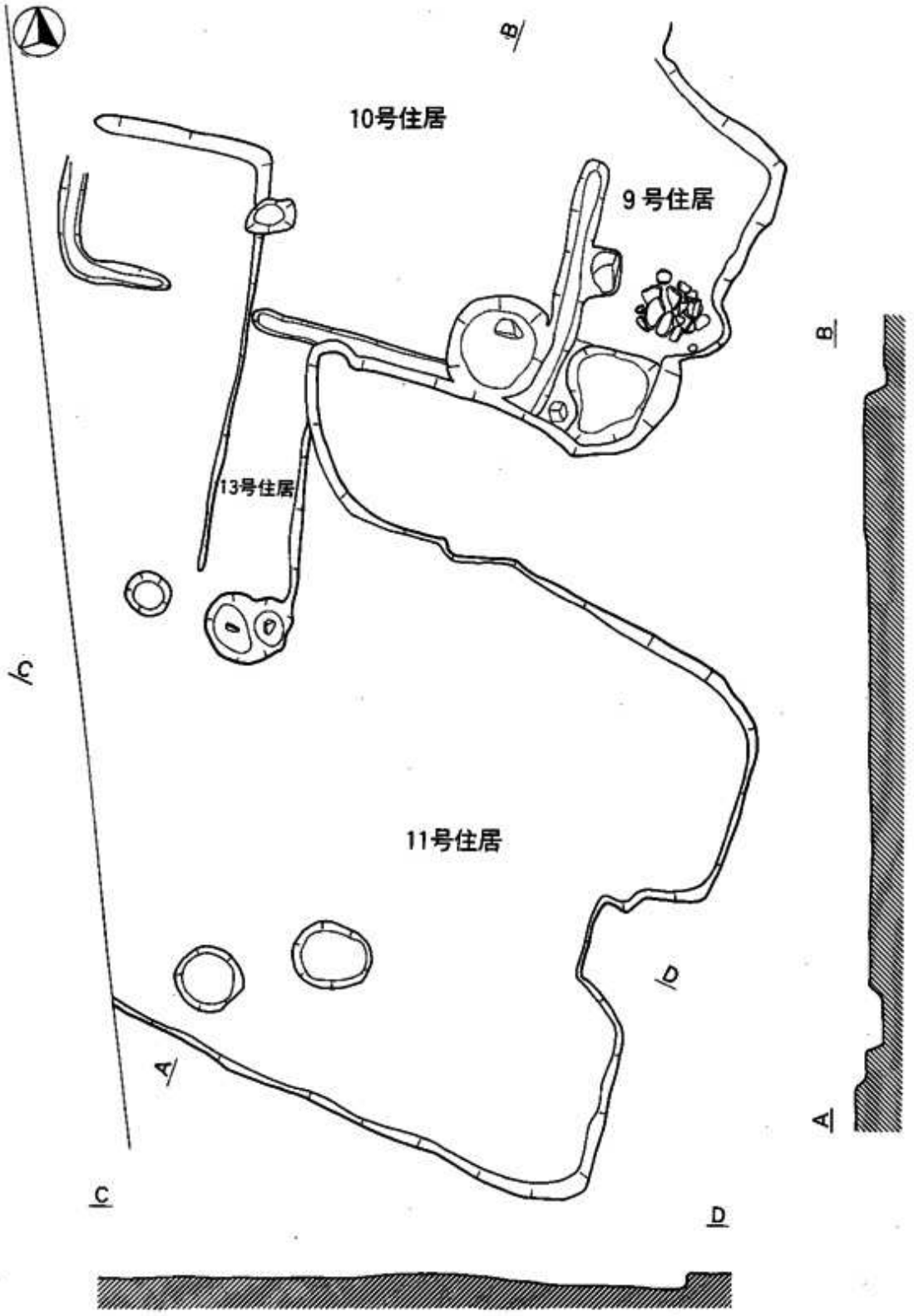
第11号住居址

遺構　本址は調査区の南西隅にあり、H－10グリッドに位置する。北側は第10、13号住居址と重複し、西側は調査区外にかかっている。平面形態は隅丸方形を呈すると考えられるが、東壁中央に台形状の凹みが認められる。

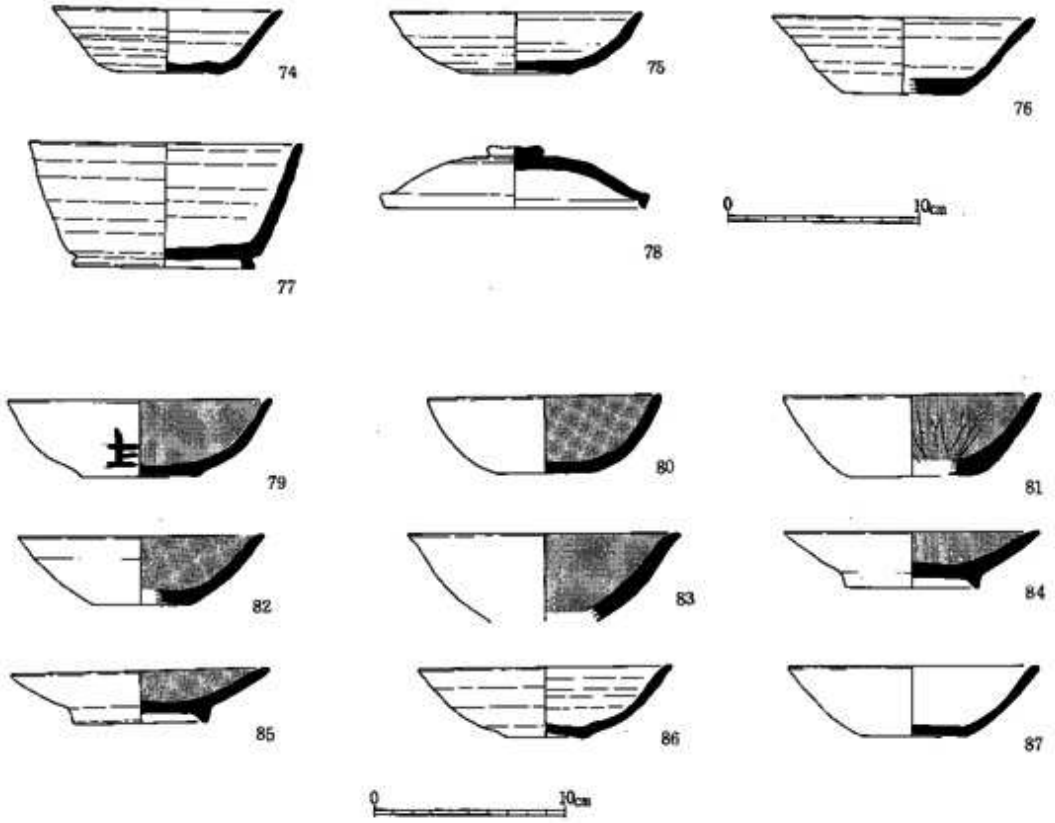
壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁高は東壁12cm、南壁10cm、北壁10cmと比較的浅い。

床面は全体的にほぼ平坦であるが、堅緻な部分は確認できなかった。南側で浅い掘り込みが2基検出された。

遺物　須恵器を主体として出土し、土師器は小片が微量出土したのみである。須恵器では、坏



第16図　9、10、11、13号住居址



第17図　11、12号住居址出土土器

(74～77) があり、(74～76) は無台、(77) は高台付である。坏蓋 (78) は扁平な宝珠形のつまみを有する。

時期は9世紀前半に比定できよう。

第12号住居址

遺構　本址は調査区の北西隅にあり、A－12グリッドに位置する。住居の一部を発掘したのみで規模は不明であるが、平面形態は隅丸方形を呈すると考えられる。第4号住居址と重複し、本址が掘り込みで斬っている。

壁はやや緩やかな傾斜で掘り込まれ、壁高は東壁10cm、南壁14cmを測る。

床面はよく踏み固められて堅緻で平坦である。第4号住居址床面との比高差は約10cmを測る。柱穴は東壁から床面にかけて2基検出された。

遺物　土師器を主体に少量の須恵器が出土している。土師器坏（79～83）は全て黒色処理が施されている。皿（84、85）は、直線的に伸びる扁平な体部に高台を付けたものである。須恵器皿（86、87）は無高台で、体部は直線状に開いている。

時期は9世紀中頃に比定できよう。

第13号住居址

遺構　本址は調査区の西端にあり、1－11グリッドに位置する。重複が著しく東壁と床面の一部が検出されたにすぎない。床面は平坦で、第11号住居址床面との比高差は約8cmを測る。

2）　小竪穴

小竪穴は総数57基が発見された。分布は調査区域のほぼ全域にわたって存在するが、強いて集中箇所をあげれば1、2号住居址と4、5、12号住居址との間、1、2号住居址と9、1号住居址の間の2箇所があげられる。

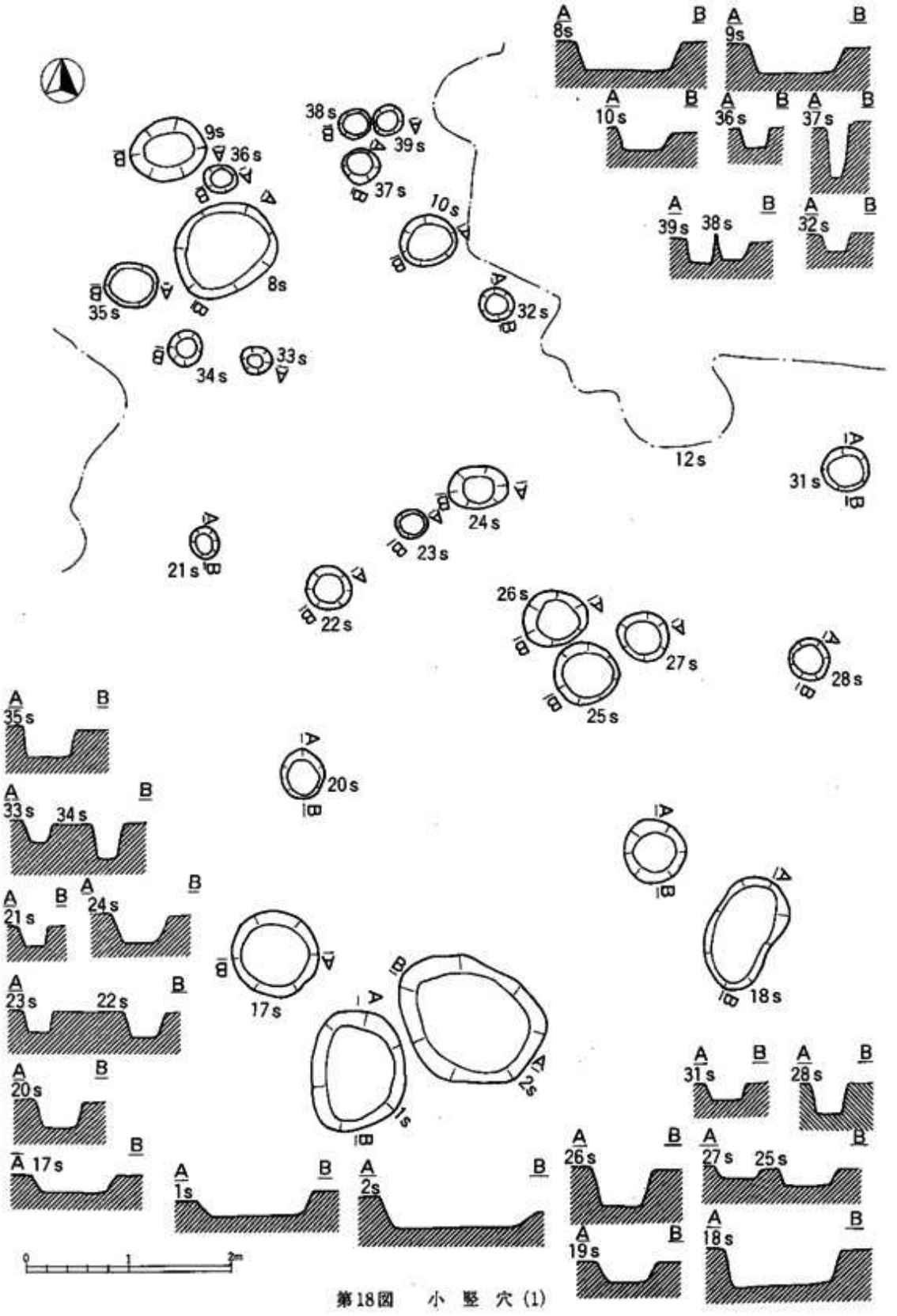
平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は29×30cmから115×147cmまで大小さまざまである。1、2号住居址と4～12号住居址との間の小竪穴は比較的規模が大きく、1、2号住居址と9、11号住居址との間のものは小竪穴というよりピットないし柱穴状の大きさを有する小さなものが多い。これらの小竪穴には、掘立柱建物址のような規則性を見い出すことができなかった。

P2表　小竪穴一覧表

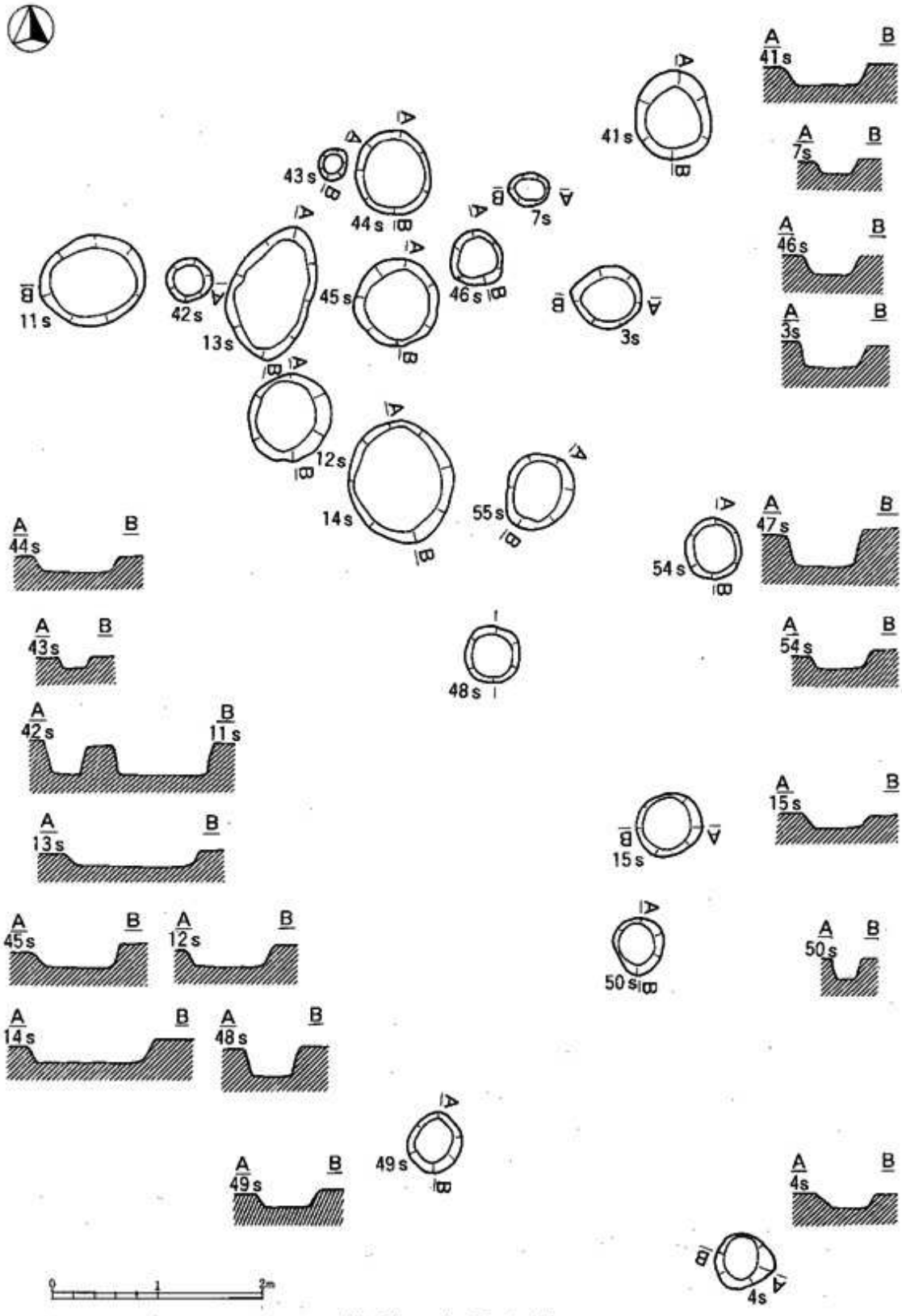
No.	確認規模	平面形	断面形	底面規模	底　面	深　さ	図　版	備　　考
1	115×92	長楕円	たらい状	88×67	平坦	23	1	土師器小形甕
2	147×115	〃	〃	115×88	〃	30	1	土師器小形甕
3	68×58	円	〃	49×40	〃	24	2	
4	56×55	〃	〃	33×39		15	2	
5	27×25	〃	〃	17×15			3	
6	38×40	〃	〃	36×36		33	3	
7	38×33	〃	〃	28×20		15	2	
8	103×90	〃	〃	82×70		26	1	
9	73×60	長楕円	〃	47×33		29	1	
10	55×50	円	〃	43×35		22	1	土師器坏
11	98×85	長楕円	〃	82×63		30	2	

No.	確認規模	平面形	断面形	底面規模	底　面	深　さ	図　版	備　　考
12	84×80	円	たらい状	62×55		22	2	
13	117×84	長楕円	〃	104×68		15	2	
14	117×100	円	〃	97×83		23	2	
15	63×59	〃	〃	44×49		13	2	
16	73×77	〃	〃	66×63		15	3	
17	84×82	〃	〃	65×57		19	1	
18	112×74	長楕円	〃	97×52		34	1	
19	60×55	円	〃	39×42		20	1	
20	48×34	〃	〃	43×30		30	1	
21	33×28	〃	〃	20×15		19	1	
22	43×45	〃	〃	30×28		24	1	
23	20×29	〃	コップ状	22×20		22	1	
24	58×40	長楕円	たらい状	30×26		27	1	
25	60×60	円	〃	45×44		15	1	
26	63×55	〃	〃	37×38		37	1	
27	47×50	〃	〃	32×45		12	1	
28	40×40	〃	コップ状	26×28		29	1	
29	84×70	〃	たらい状	65×50		31	3	
30	87×80	〃	〃	70×68		18	3	
31	43×45	〃	〃	29×33		15	1	
32	32×33	〃	〃	20×22		17	1	
33	32×28	〃	〃	15×13		22	1	
34	32×36	〃	コップ状	18×18		33	1	
35	52×43	長楕円	たらい状	42×33		31	1	
36	32×29	円	コップ状	20×18		19	1	
37	37×22	〃	〃	35×24		55	1	
38	32×30	〃	〃	24×21		24	1	
39	29×30	〃	〃	20×19		28	1	
40	42×38	〃	たらい状	25×25		20	3	
41	83×71	〃	〃	57×50		20	2	
42	43×43	〃	コップ状	28×29		30	2	
43	33×27	〃	たらい状	20×17		10	2	
44	80×71	〃	〃	63×67		15	2	

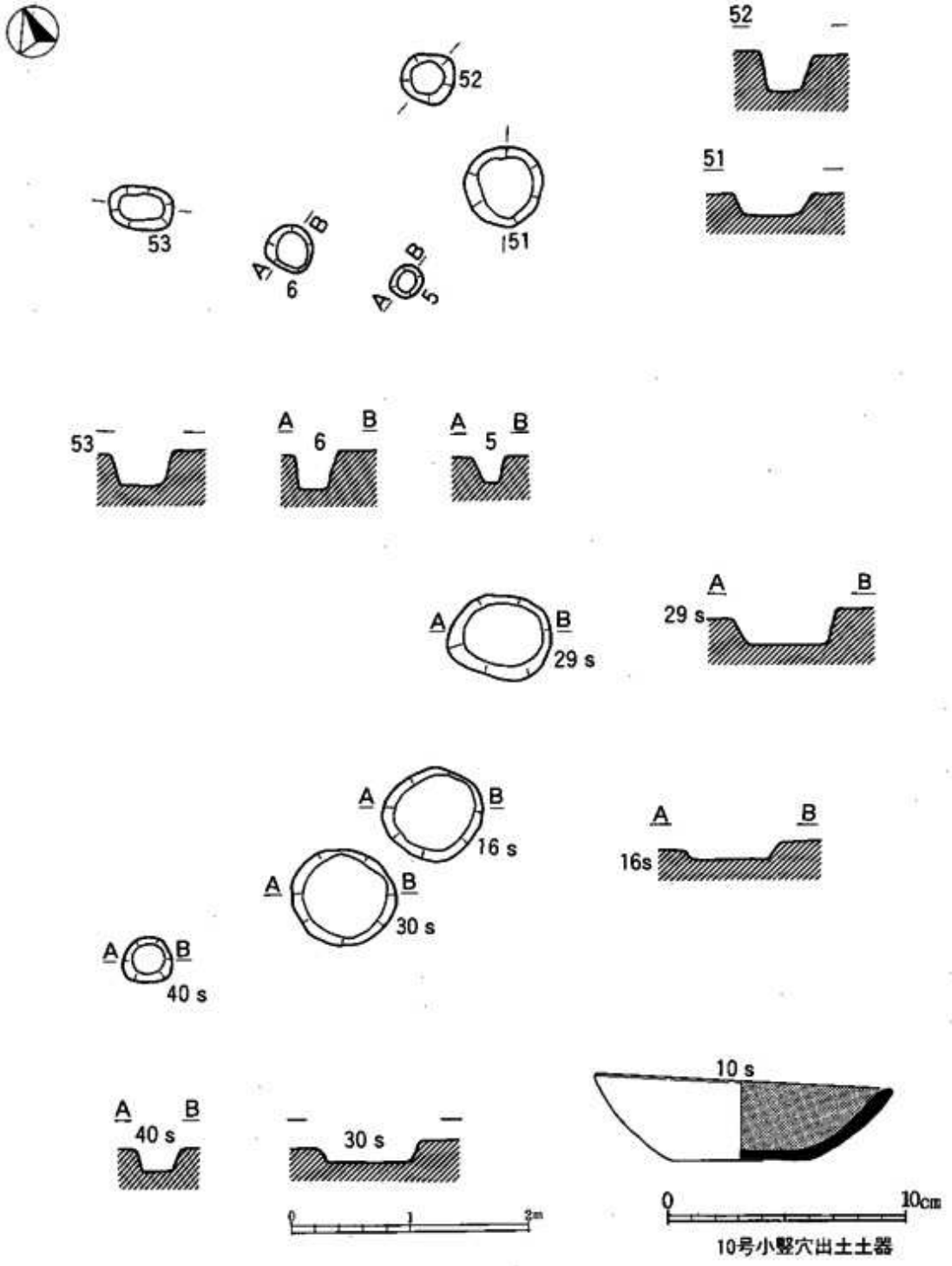
No.	確認規模	平面形	断面形	底面規模	底　面	深　さ	図　版	備　　考
45	83×80	円	たらい状	65×60		23	2	
46	53×50	〃	〃	36×36		17	2	
47	76×64	〃	〃	56×46		36	2	
48	53×50	〃	〃	40×37		27	2	
49	60×53	〃	〃	42×35		16	2	
50	54×49	〃	コップ状	39×34		20	2	
51	76×65	〃	たらい状	50×44		17	3	
52	45×45	〃	〃	27×27		35	3	
53	53×37	長楕円	〃	37×22		30	3	
54	59×54	〃	コップ状	46×40		17	2	
55	40×40	〃	たらい状	32×23		12	3、8号住居址、小竪穴	
56	45×60	〃	〃	29×33		15	〃	
57	41×40	〃	〃	26×21		14	〃	


8s
9s
10s
36s
37s
39s
38s
32s
35s
34s
33s
12s
31s
24s
23s
21s
22s
26s
27s
28s
25s
20s
17s
18s
1s
2s
19s
0
1
2m

第18図　小 竪 穴 (1)


A 41s B
41s
A 7s B
43s
44s
7s
A 46s B
46s
11s
42s
13s
45s
3s
A 3s B
12s
14s
55s
A 44s B
54s
A 47s B
A 43s B
48s
A 54s B
A 42s B 11s
A 15s B
15s
A 13s B
A 45s B
A 12s B
50s
A 50s B
A 14s B
A 48s B
49s
A 49s B
A 4s B
4s
0 1 2m

第19図　小 竪 穴 (2)


52
52
51
51
53
53
A
B
6
A
B
5
A
B
29 s
A
B
29 s
A
B
16 s
A
B
16s
A
B
30 s
A
B
40 s
A
B
40 s
30 s
10 s
0
1
2m
0
10cm
10号小竪穴出土土器

第20図　小 竪 穴 (3)

第3表　出土土器観察表

出土地点	図番号	種別	器種	法径(cm) 口径	底径	器高	色調 内	外	焼成	成形・調整・形態の特徴	備考
1住	1	土師器	坏	13.6	4.6	3.6	黒	赤褐色	良	ロクロナデ、黒色処理、底面回転糸切り	
	2	〃	〃	14.9	7.2	4.3	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
	3	〃	〃	13.9	4.2	4.3	〃	暗褐色	〃	〃　〃　〃　後外面ヘラケズリ	
	4	〃	〃	15.3		4.0	〃	黄褐色	〃	〃　〃	
	5	〃	〃	14.5	5.1	2.9	〃	暗褐色	〃	〃　〃　付高台、底面回転糸切り	
	6	須恵器	〃	13.3	5.6	3.2	灰白色	灰白色	〃	〃　底面回転糸切り	
	7	土師器	〃	-	-	-	黒	暗褐色	〃	底面回転糸切り	墨書
	8	灰釉陶器	長頸瓶		6.0	12.4	淡緑色	灰白色	不良	ロクロナデ、付高台、底面回転糸切り	
2住	9	土師器	坏	16.3	5.6	4.9	黒	暗褐色	良	ロクロナデ、黒色処理、底面回転糸切り	
	10	〃	〃	13.5	5.3	2.9	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
3住	11	〃	〃	13.0		-3.7	〃	〃	〃	〃　〃	
	12	須恵器	〃	13.3		-4.4	黄褐色	黄褐色	不良	〃	
4住	13	土師器	〃	13.7	6.6	3.7	黒	暗褐色	良	〃　黒色処理、底面回転糸切り	
	14	〃	〃	12.2	4.9	3.9	〃	黄褐色	〃	〃　〃　〃	
	15	〃	〃	12.9	6.0	4.4	〃	赤褐色	〃	〃　〃　〃	
	16	〃	〃	13.1	5.3	3.3	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
	17	〃	〃	13.3	5.6	5.4	〃	黄褐色	〃	〃　〃　〃	
	18	〃	〃	15.0	5.7	4.7	〃	赤褐色	〃	〃　〃　〃	
	19	〃	〃	13.7	5.8	3.7	〃	黄褐色	〃	〃　〃　〃	7住を接合
	20	〃	〃	12.8	5.8	4.3	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
	21	〃	〃	11.7	5.8	4.5	〃	赤褐色	〃	〃　〃　〃　口縁面取り	
	22	〃	〃	12.7		-	〃	黄褐色	〃	〃　〃	
	23	〃	〃	15.5	7.7	4.8	〃	〃	〃	〃　〃　底面回転糸切り	
	24	〃	〃	15.6	4.9	5.4	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
	25	須恵器	〃	13.0	4.3	3.25	青灰色	青灰色	〃	〃　底面回転糸切り	
	26	〃	〃	13.5	6.6	4.1	灰褐色	灰褐色	不良	〃　〃	
	27	灰釉陶器	皿	14.5	6.6	2.8	淡緑色	淡緑色	良	ロクロナデ、付高台、底面回転ヘラケズリ	
	28	〃	椀	16.6	7.7	5.5	灰白色	灰白色	〃	〃　ヘラケズリ、付高台、底面ナデ	
	29	土師器	坏	-	-	-	黒	暗褐色	〃		墨書
	30	〃	〃	-	-	-	〃	〃	〃	底面回転糸切り	〃
	31	〃	甕	16.6	-	-	暗褐色	〃	不良	内外面カキ目	
	32	〃	鉢	23.6	-	-	黒	黄褐色	良	ロクロナデ、黒色処理	
	33	〃	甕	24.2	-	-	暗褐色	暗褐色	〃	外面ハケメ、内面カキ目	
5住	34	〃	坏	13.8	5.7	5.0	黄褐色	黄褐色	やや良	ロクロナデ、底面回転糸切り	
	35	〃	〃	14.8	7.4	4.2	黒	赤褐色	良	〃　黒色処理、底面回転糸切り	
	36	〃	〃	14.6	7.3	4.3	〃	暗褐色	〃	〃　〃　〃	
	37	〃	〃	16.9	6.3	4.8	〃	〃	〃	〃　〃　〃	
	38	〃	〃	14.5		-	〃	〃	〃	〃　〃	
	39	〃	〃	14.5	6.8	5.5	〃	〃	〃	〃　〃　底面回転糸切り	
	40	〃	〃	12.9	6.0	3.3	〃	〃	〃	〃　〃　〃	墨書
	41	〃	〃	13.1		-	〃	〃	〃	〃　〃	〃
	42	〃	〃	13.2	5.2	4.0	〃	〃	〃	〃　〃　底面回転糸切り	

出土地点	図番号	種別	器種	法径 (cm) 口径	底径	器高	色調 内	外	焼成	成形・調整・形態の特徴	備考
5住	43	土師器	坏	12.4	5.5	2.6	黒	暗褐色	良	ロクロナデ、黒色処理、底面回転糸切り、付高台	墨書
	44	〃	〃	-	-	-	〃	〃	〃	〃 〃	〃
	45	須恵器	〃	13.4	5.1	3.5	暗灰色	暗灰色	〃	〃 底面回転糸切り	
	46	〃	〃	13.5	5.9	4.4	灰黄色	灰黄色	不良	〃 〃	
	47	〃	〃	13.5	4.9	3.4	青灰色	青灰色	良	〃 〃	
	48	〃	〃	13.4	5.1	3.3	〃	〃	〃	〃 〃	
	49	〃	〃	13.0	5.5	3.9	〃	〃	〃	〃 〃	
	50	土師器	甕	22.8	-	-	黄褐色	暗褐色	〃	外面ハケメ、内面カキ目、指圧	
	51	灰釉陶器	長頸瓶	10.6	-	-	灰白色	灰白色	良	ロクロナデ	
	52	〃	〃	10.4	-	-	〃	〃	〃	〃	
6住	53	土師器	坏	13.3	6.0	4.1	黄褐色	黄褐色	〃	〃 底面回転糸切り	
	54	〃	〃	13.9	7.0	3.8	黒	暗褐色	〃	〃 黒色処理、底面回転糸切り	
	55	〃	〃	13.0	6.9	4.4	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	56	〃	〃	13.1	5.6	4.4	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	57	〃	〃	15.7	6.8	5.8	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	58	〃	〃	13.7	5.7	4.1	〃	〃	〃	〃 〃 〃	墨書
	59	〃	〃	13.1	6.5	4.4	〃	黄褐色	やや良	〃 〃 〃	
	60	〃	〃	14.6	6.8	5.4	〃	黒褐色	良	〃 〃 〃	
	61	須恵器	〃	12.8	5.2	3.5	灰黒色	灰黒色	〃	〃 底面回転糸切り	
7住	62	土師器	〃	15.7	7.7	5.8	黒	黒褐色	〃	〃 黒色処理、底面回転糸切り	
	63	〃	〃	15.5	6.5	5.0	〃	赤褐色	〃	〃 〃 〃	
	64	〃	〃	13.1	5.0	4.1	赤褐色	〃	〃	〃 底面回転糸切り	
	65	須恵器	〃	13.0	-	-	暗灰色	暗灰色	〃	〃	墨書
	66	〃	〃	-	-	-	〃	〃	〃	〃	〃
9住	67	土師器	〃	13.3	6.8	3.6	黒	暗褐色	〃	〃 黒色処理、底面回転糸切り	
	68	須恵器	〃	-	7.5	-	暗灰色	青灰色	〃	〃 付高台	
	69	〃	坏蓋	17.7	-	-	〃	〃	〃	天井部ヘラケズリ、外周ロクロナデ	
10住	70	土師器	坏	15.2	7.5	5.2	黒	赤褐色	〃	ロクロナデ、黒色処理、底面回転糸切り	
	71	〃	小形甕	11.0	5.5	9.4	暗褐色	暗褐色	〃	外面カキ目、内面ナデ	
	72	〃	〃	-	5.6	-	〃	〃	〃	〃 〃	
	73	〃	甕	20.1	-	-	〃	〃	〃	外面ハケメ、内面ロクロナデ、指圧	
11住	74	須恵器	坏				青灰色	青灰色	〃	ロクロナデ、底面回転糸切り	
	75	〃	〃	13.0	5.7	3.2	〃	〃	〃	〃 〃	
	76	〃	〃	13.5	6.0	4.0	〃	〃	〃	〃 〃	
	77	〃	〃	14.1	8.5	6.5	〃	〃	〃	〃 付高台、底面回転ヘラケズリ	
	78	〃	坏蓋	13.3	2.6	3.1	〃	〃	〃	天井部ヘラケズリ、外周ロクロナデ	
12住	79	土師器	坏	13.6	6.2	4.0	黒	赤褐色	〃	ロクロナデ、黒色処理、底面回転糸切り	墨書
	80	〃	〃	12.0	5.0	4.0	〃	〃	不良	〃 〃 〃	
	81	〃	〃	13.2	6.3	4.2	〃	黄褐色	やや良	〃 〃 〃	
	82	〃	〃	12.7	5.0	3.6	〃	〃	良	〃 〃 〃	
	83	〃	〃	14.1	-	-	〃	暗褐色	〃	〃 〃	
	84	〃	皿	13.2	6.4	2.9	〃	黄褐色	〃	〃 〃 付高台	
	85		〃	13.4	6.5	2.7	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	86	須恵器	〃	13.0	4.2	3.6	灰白色	灰白色	〃	〃 底面回転糸切り	
	87	〃	〃	13.0	5.3	3.7	〃	〃	〃	〃 〃	

第Ⅳ章　ま　と　め

調査された500㎡の区域からは平安時代の竪穴住居址13軒、小竪穴57基が発見された。住居址、小竪穴とも調査区全域に分布しており、この地域が遺構の稠密地域であっったことがうかがえる。

今回の調査で出土した最も古い遺物は11号住居址の覆土中から得られた弥生時代後期の土器片である。これに伴う遺構は発見されなかったが、平成2年の調査では住居址が一軒検出されているので、弥生時代の集落の一部に含まれていたことがわかる。

平安時代の遺構で注目される点は、住居の密集性が高いこと、前回の調査では4棟が発見された建物址が見当たらなかったこと、小竪穴が多かったことなどである。平成2年度の調査結果を参考として集落の構成を考えてみると、南北に長い小台地上の全面に住居が造られ、東側の浅谷に面する地域に建物址が、西側の田川に面する地域には小竪穴が密に設けられていたと復元できよう。時期的には9世紀を中心とする比較的短期間の集落であったといえる。

周辺の中挟遺跡との関連性を次に考えてみたい。中挟遺跡は、東側の浅谷をはさんだ一帯から北側にかけて広範囲にわたる大集落址で、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳～平安時代と継続している。五日市場遺跡と関連をもち始めるのは弥生時代からであるが、最も強い連携をもったのは平安時代である。おそらく、古墳時代の集落が中挟遺跡の一角に出現し、それが次第に規模を拡大しつつ成長し、平安時代に入ると中挟・五日市場両遺跡は同一集落の中に含まれ発展したものと考えられる。

前回の調査では、中世に関連する道路址が発見され、「五日市場」との地名とも考え合わせ、この地域に中世遺構の存在が予想されたが、今回の調査区内からは残念ながら発見することはできなかった。今後の周辺地区の調査に期待がもたれる。

出土遺物に関しては、土師器坏の「井」の墨書土器や土錘の出土が注目された。生業的観点からの検討が必要となってこよう。

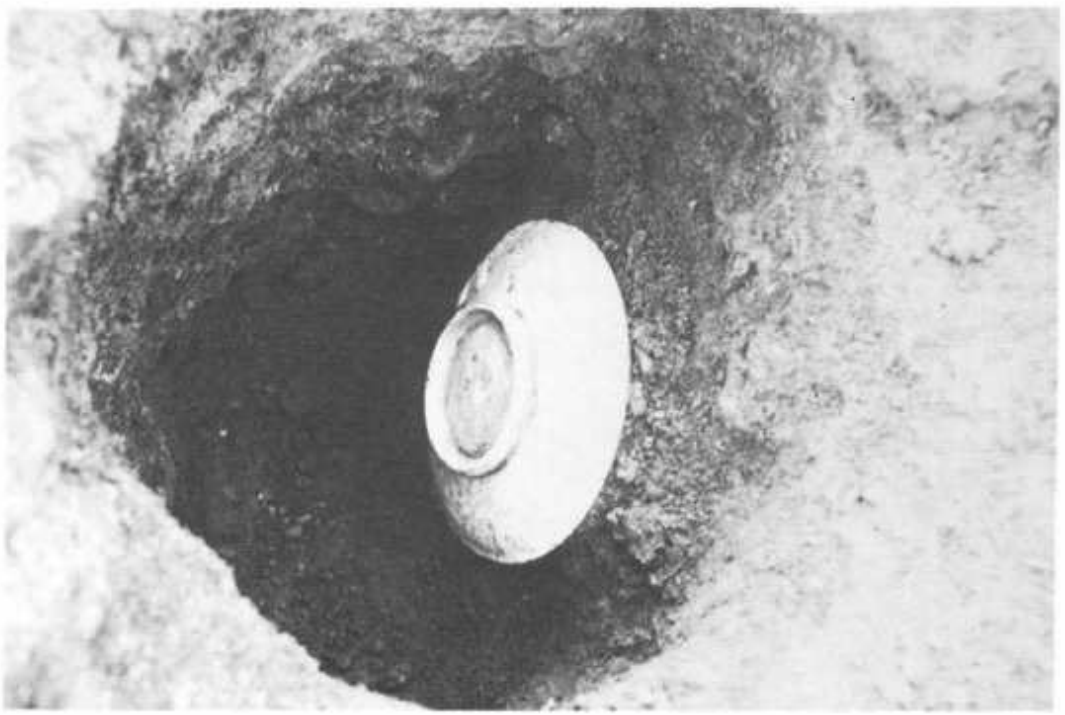
以上のように今回の調査では五日市場遺跡の一角を明らかにできたわけであるが、その成果はこの地域の古代の様相を究明するための貴重な資料を提供するものとして高い評価が与えられよう。

最後に、調査が多くの成果をあげて終了できましたのは、中信勤労者医療協会、発掘調査団そして関係する多くの地元の皆様の深い御理解と御支援の賜であります。ここに厚く感謝申し上げます。

調査区全景

第3号住居址

第4号（右）、第5号（左）、第12号（奥）の各住居址



第4号住居址出土灰釉陶器

第6号住居址

第7号住居址（左）、第9号住居址

第9号住居址カマド

遺構検出作業

五日市場遺跡発掘調査報告書

平成6年3月24日印刷
平成6年3月25日発行

発行　塩尻市教育委員会
印刷　ショウリプリント